

業務実績書

研究所 No.55

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	情報システムの整備 ((1)-①-1)		
【事業概要】 文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システム面から文化財に関する専門的アーカイブの拡充、データベースの充実を支援する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 勝木言一郎
【スタッフ】 綿田 稔, 土屋貴裕 (以上、企画情報部), 崎部 剛 (管理部 LAN 委員), 俵木 悟 (無形文化財部 LAN 委員), 犬塚将英, 森井順之 (以上、保存修復科学センターLAN 委員), 二神葉子 (文化遺産国際協力センター LAN 委員)			
【主な成果】 システム管理については、保守契約等の協議、メールアカウントの管理、コンピュータ・ウィルス対策を行い、現在のネットワーク環境の維持に努めた。またネットワーク環境の整備の一環として、国立文化財機構間 VPN の接続の準備、居室内スイッチの更新、情報セキュリティ強化システムの導入を進め、情報基盤の整備と拡充を進めた。			
【年度実績概要】 1. システム管理 所内におけるシステム管理については、システム管理者がシステム全体の日常的な運用をはじめ、保守契約等の協議、メールアカウントの管理、グループウェアのユーザー管理、コンピュータ・ウィルス対策を行った。 2. ネットワーク環境の整備 現在のユーザー環境を維持しつつ、より安全で、より高速な情報ネットワークの構築を図るために、Interscan および居室内スイッチを更新するとともに、Fire Wall を補強した。 3. 国立文化財機構間における情報ネットワークの整備 国立文化財機構間における情報ネットワークの整備の一環として、機構間グループウェアの運用を開始した。グループウェアの運用開始に際しては、事前にグループウェア「ガルーン2」の説明会を2度開催した。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6111

自己点検評価調書

研究所 No. 55

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備についてはネットワーク環境の更新に伴い、セキュリティの強化及び高速化が図られた結果、適時性、効率性、継続性、正確性が向上したと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備についてはセキュリティの強化及び高速化を図るに当たり、現在のユーザー環境を維持しつつ、より効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新を進めた。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6112

業務実績書

研究所 No. 56

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実 ((1) - ① - 2)		
【事業概要】 コンピュータウィルスをはじめとする様々な脅威から研究所の情報を守り、正確な情報を発信して行くため、ネットワークのセキュリティを強化する。また、文化財情報の電子化によるデータベース及びホームページに掲載された情報の所内外への提供を推進するため、サーバ機器・ネットワークといった情報基盤システムの整備・充実を行う。			
【担当部課】	管理部文化財情報課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥（文化財情報係長）ほか1名			
【主な成果】 情報交換システムの更新及びウィルス対策ソフトを更新することによりセキュリティの強化を図った。また、サーバ及び情報端末をネットワークに接続することにより情報基盤システムの整備・充実を行った。			
【年度実績概要】 情報交換システムを更新することによって、情報伝達の効率化及びセキュリティの強化を行った。また、最新のウィルス対策ソフトを導入することにより、ネットワークシステムのセキュリティ強化を行った。新規サーバ及び各研究室の情報端末をネットワークに接続することにより、情報基盤システムの整備・充実を行った。			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6112

自己点検評価調書

研究所 No. 56

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性:新システムの導入及び最新のウィルス対策を行った。 効率性:機構本部との情報共有が可能となった。 継続性:不具合なく適切なネットワーク環境を維持した。 正確性:情報漏洩・改竄、ネットワークを介しての攻撃は皆無であった。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報交換システムの更新と最新のウィルス対策ソフトを導入することによりネットワークシステムのセキュリティ強化を行った。またサーバ、情報端末のネットワーク接続を行うことにより情報基盤システムの整備・充実を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ネットワーク機器の更新について、やや遅延しているものの、次期ネットワークシステムとしては高速化とセキュリティ強化を計画している。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財に関する専門的アーカイブの拡充 ((1)-②-1)
【事業概要】 文化財関連の図書等の文字資料およびアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、一般利用者へのそれらの提供、そのためのデータベースや検索システムの構築・運用を行い、質の高い専門的アーカイブの拡充を図る。あわせて、上記アーカイブに必要不可欠である画像形成技術等の継続的な更新を行い、最先端の研究活動を支援することを目的とする。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子（以上、企画情報部）	
【主な成果】 1) 公開用 SQL データの更新・運用。 2) 画像資料のデジタル化・貴重書のCD-ROM化 3) 近現代美術関係文献等のデータベース化 4) 朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化 5) 『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍』の刊行	
【年度実績概要】 1) 資料閲覧室の運営： 文化財に関する諸資料の収集・管理・公開・データベースの構築・運用を基本に、より充実したアーカイブ形成に努めた。その一環として、インターネット上での公開を目指して朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化を行った。また、劣化が進む資料類の保護対策の一環として貴重雑誌のCD-ROM化をすすめるとともに、国内外の関連機関との協力関係構築とへの取り組みと有効な資料公開システム構築のため協議を行った。また、『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍』を刊行した。 2) 画像情報室： 他部・センター、他機関との共同調査研究により文化財の画像資料の収集・作成を行った。06年度より継続の尾高鮮之助撮影フィルムについて文化遺産国際協力センターの協力を得て画像をデジタル化した。 企画情報部にて作成・更新中の37種データベース： 1) 所蔵和漢書(～09)、2) 受入和漢書(10年度分)、3) 所蔵洋書、4) 所蔵簡易図書、5) 売立目録、6) 所蔵美術館博物館収蔵目録、7) 和雑誌誌名、8) 所蔵洋雑誌誌名、9) 所蔵中国雑誌誌名、10) 所蔵韓国雑誌誌名、11) 所蔵和雑誌巻号(～03)、12) 所蔵洋雑誌巻号(～05)、13) 所蔵和雑誌巻号(02以降)、14) 所蔵洋雑誌巻号(06以降)、15) 所蔵中国雑誌巻号、16) 所蔵韓国雑誌巻号、17) 所蔵地方公共団体刊行報告書、18) 所蔵香取秀真資料関係、19) 展覧会(02まで)、20) 展覧会(03以降)、21) 近現代作家名、22) 近現代展覧会開催情報(43以降)、23) 写真原板、24) キャビネット写真、25) 古美術文献目録(明治～66)、26) 近現代美術文献目録(35～90)、27) 美術館博物館名、28) 東京文化財研究所年表、29) 美術研究総目次、30) 撮影調査票、31) 古美術展覧会開催情報(43以降)、32) 物故者記事、33) 美術懇話会、34) 開所記念展覧会出品目録、35) 美術家美術関係者情報、36) 画廊情報、37) 美術史論壇、 インターネット公開中の研究資料検索システムに提供中の15種データベース： 1) 美術関係図書、2) 伝統芸能関係図書、3) 保存修復関係図書、4) 売立目録、5) 展覧会カタログ、6) 和雑誌、7) 写真原板、8) 美術家・美術関係者資料、9) 画廊資料、10) 美術関係文献、11) 『保存科学』所載文献、12) 伝統芸能関係三雑誌所載文献、13) 『美術研究』総目次、14) 近現代美術展覧会開催情報、15) 伝統楽器情報、	
【実績値】 通常フルカラー画像撮影件数 6,091 件、特殊画像撮影件数 1,583 件、デジタル画像撮影の全体に占める割合 100%、図書書受入数：和漢書 764 件、洋書 33 件、展覧会図録・報告書等 4,174 件、雑誌 1,893 件(受入総数 6,864 件)、35 種の目録所在情報(作成件数 28,761 件、収録件数 973,420 件、公開件数 952,909 件)、インターネットで公開中の目録累計数 15 種、資料閲覧室の利用状況：公開日総数 135 日・利用者年間合計 1,017 人、目録刊行 1 件 (①)	
【備考】 所内イントラによる目録の公開 http://www2.tobunken.go.jp ①『東京文化財研究所蔵所目録8 漢籍』(11.03)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6121

自己点検評価調査

研究所 No. 57

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	文献資料 受入件数	画像資料 収集件数	データベース 公開件数	閲覧者利用者数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	質の高い文化財に関する専門的アーカイブの拡充に努め、一般利用者への提供を行うべく、公開用 SQL データの更新・運用、画像資料のデジタル化、劣化が進む貴重書のCDROM化、近現代美術関係文献のデータベース化、インターネット上での公開を目指して朝日新聞社版『日本美術年鑑』のテキスト化をすすめ、『東京文化財研究所蔵書目録8 漢籍』を刊行し、実施計画に従い遂行できたので、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に則り、各年ともに、文化財関連の図書等の文字資料およびアナログ・デジタル画像資料の登録・管理、一般利用者へのそれらの提供、そのためのデータベースや検索システムの構築・運用を行い、あわせて、文化財アーカイブに必要不可欠である画像形成技術等の継続的な更新を行うことで、最先端の研究活動を支援することができた。次期中期計画においても、この路線を継続・発展させ、より質の高い専門的文化財アーカイブの拡充を目指してゆきたい。

業務実績書

研究所 No.58

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化 ((1)-②-2)		
【事業概要】 無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。前中期計画（平成17年度終了）の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、金子 健、綿貫 潤、星野厚子（以上、無形文化遺産部）			
【主な成果】 2006年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープのデジタル化を昨年度に引き続き実施した。カセットテープに関しても、将来のデジタル化を視野に、収録内容の確認を含めた整理に着手した。所蔵画像資料のデジタル化については、データベース作成の一環として、一昨年度から本格的に始まった歌舞伎写真（2008年度寄贈・故梅村豊撮影）の整理を進めた。			
【年度実績概要】 今年度、無形文化遺産部が推進した音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、これまで収集実績が比較的少なかった諸芸（舌耕芸など）の分野、および1960年代の放送録音を中心に行った。後者については、放送局にも保存されていない録音が多いことから、その資料的な価値が近年再認識されつつあるもので、今年度はCD150枚を作成した。また、媒体変換を完了した音声資料から、インデックス付与済みCDを92枚作成した。カセットテープに関しては、寺事の現地録音を中心に内容確認を行い、リストを作成した。 所蔵画像資料のデジタル化事業の一環として実施しているデータベース作成の内、今年度は2008年度に寄贈を受けた歌舞伎写真の整理を中心に行い、昭和40年代のモノクロネガ1203点について所蔵一覧を公表した。このほか、無形文化財関連の作成DVD454枚を登録した。			
【実績値】 作成資料 [CD] 242枚, [DVD] 454枚			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6122

自己点検評価調書

研究所 No. 58

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	資料作成数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新たに寄贈された資料を中心に、劣化が懸念される貴重なアナログ資料の媒体変換を行うとともに、デジタル化しただけでは一般の利用には供しがたい音声資料へのインデックス付与も着実に実施している。また、専門の研究者も少なく、これまで収集実績の乏しかった分野に加え、資料的な価値が再認識されつつある放送録音の資料整理も併せて遂行している。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業は、従来水準を維持している。また、音声資料、写真資料ともに、将来的なデータベース公開に向けて、所蔵一覧の作成を着実に進めている。以上により、事業の進捗状況を順調と判定した。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6131

業務実績書

研究所 No.59

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	国際資料室の整備 ((1)-③-1)		
【事業概要】 本プロジェクトは、国際資料室に配置する外国の文化財や文化財保存修復事業に関する蔵書・資料の質及び量を充実させ、国際文化財保存修復協力センターでの関連の研究や事業に利用するとともに、国内外の関連分野の専門家が閲覧・利用できるようにする。同時に、資料のデータベース化を行い、利用者の便を図る。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員 二神葉子
【スタッフ】 清水真一、岡田 健、山内和也、朽津信明、友田正彦（以上、文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 国内外で図書その他の資料を収集し、整理・分類して目録に登録し、データベース化した。			
【年度実績概要】 1. 資料の収集とデータベース化 今年度はインド、インドネシア、中国、タイ、中央アジア諸国などの文化財に関する資料及び世界遺産、保存科学、文化財保護制度などに関する書籍 1087 点（和漢書 555 点、洋書 532 点）、雑誌 104 点の資料を収集し、データベース化した。 2. 『国際資料室蔵書目録』の作成 2011（平成 23）年 3 月に、今年度に国際資料室で受け入れてデータベース化した 1087 点（和漢書 555 点、洋書 532 点）の資料、及び国際資料室で所蔵する雑誌 456 種類を掲載した『国際資料室蔵書目録』を発行した。			
【実績値】 目録作成数 1 件 (①)			
【備考】 ①『国際資料室蔵書目録』 11.03			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6131

自己点検評価調書

研究所 No. 59

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	目録作成数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究業務に必要な資料を効率的に多数収集し、データベース化している。内容は外国の調査地で収集した資料や、文化財保護制度に関する外国語文献など独自性を有するものである。次年度以降は、より大きな枠組みである文化財保護制度に関する調査研究の一環として、引き続き同様の事業を実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の収集は例年の実績を堅持し、順調に実施することができた。今後も、書籍に限定せず会議資料や機関のパンフレット、地図など、多様な資料の充実に努めたい。

業務実績書

研究所 No. 60

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化財関係資料や図書の収集・整理・公開・提供の充実 ((1) - ③ - 2)		
【事業概要】 文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者および一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥（文化財情報係長）ほか6名			
【主な成果】 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入および寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。			
【年度実績概要】 図書等の収集・整理： 遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行なった。また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力の継続等、所外の利用者への情報提供も行なっている。 図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。 利用者サービス： 歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供している。遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行なっている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行なっている。			
【実績値】 受入数： 購入図書 791 冊 寄贈図書 7,445 冊 雑誌 1,502 タイトル 写真 10,516 点 利用者サービス： 一般利用者数 622 人 利用冊数 4,084 冊 来館者複写件数 1,054 件 遠隔利用： 複写件数 770 件 貸借件数 4 冊			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6132

自己点検評価調書

研究所 No. 60

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考 適時性:刊行された図書資料等の収集・整理・公開を行った。 発展性:遠隔地利用者サービスとして現物貸借を開始した。 継続性:図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。						

2. 定量的評価

観点	資料の受入数	利用者数	複写件数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	書庫の狭隘化を緩慢すべく、重複図書を抜取、各部署への配付および別置を行ったが、依然として狭隘化が深刻な状態であるため、書庫内の整理、棚板の追加等による対応措置を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	利用者数、利用冊数、複写件数のいずれもが昨年度並みの実績を出しており、順調といえる。今年度より相互貸借の受付を開始したので、次年度には新たな実績が予想される。

業務実績書

研究所 No. 61

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化財保存修復国際情報のデータベース化に関する研究 ((1)-(4))		
【事業概要】 世界各地の文化財およびその保存修復に関する情報を収集・整理し、調査研究に活用するとともに、関連分野の専門家に対して効果的に発信していくことを目的にデータベースを作成する また、文化遺産国際協力センターでこれまでに実施してきた事業の成果をデータベース化して公開する。さらに、ウェブサイトを利用してセンターの事業について広報を行う。			
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	主任研究員 二神葉子
【スタッフ】 清水真一、岡田 健、山内和也、朽津信明、友田正彦（以上、文化遺産国際協力センター）			
【主な成果】 情報収集、データベース化：平成13年から収集している世界各国の文化財保護に関連する法令について、和訳を行うとともに、保護の対象とする文化財により分類、データベース化した。 また、「文化財保護関連法令シリーズ」としてタジキスタン、ブータンの法令集およびフランス文化財法典（後編）を出版した。 さらに、オーストリアでの文化財データベースに関して、連邦記念物局での聞き取り調査を行った。			
【年度実績概要】 1. 情報の収集とデータベース化 平成13年度から収集を行っている世界各国の文化財保護に関連する法令について、引き続き法令を収集するとともに、日本の文化財保護法で用いられている分類を手がかりとして、昨年度に引き続き各国の法令が対象とする文化財による分類を行い、データベース化を実施している。 2. 情報の発信 これまでに和訳した世界各国の文化財保護に関連した法令の条文についてPDF化を行い、ウェブサイトにて公開している。印刷物としては、まず、タジキスタンの法令についてロシア語から和訳し、「文化財保護関連法令シリーズ[10]」として印刷・出版した。また、フランスの「文化財法典」の和訳のうち後半部分を「文化財保護関連法令シリーズ[9-a2]」として出版した。さらに、ブータンの文化財保護関連の法令2件を和訳している。なお、法令の翻訳にあたっては、あえて原語に忠実に説明的な直訳を心がけることで、日本語の類似の制度などとの混同を避ける工夫を図っている。 文化遺産国際協力センターのウェブサイトで、最新の出版物の目次やプレスリリース等を掲載することで、研究成果を公開している。 3. 文化財データベースに関する調査 オーストリアの文化財保護に携わる国立の機関である、Bundesdenkmalamt（連邦記念物局）の専門家に対して、文化財データベースについて聞き取り調査を行った。オーストリアでは、2010年に文化財インベントリーを完成し公開するとの方針が出されていたため、その状況について聞くことが目的であった。現状ではデータベースは構築中で、フランスなど構築済みの国について調査も行ったが、そのまま導入できるようなものはなく、結局独自のシステムを構築している。			
【実績値】 法令集作成数 3件（①～③）、データベース作成数 1件			
【備考】 ①文化財保護関連法令シリーズ [9-a2]フランス文化財法典（後編） ②文化財保護関連法令シリーズ [10]タジキスタン ③文化財保護関連法令シリーズ [11]ブータン			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6141

自己点検評価調書

研究所 No. 61

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	独創性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	出版物作成数	データベース 作成数				
判定	A	A				
備考 文化財保護に関する法令の収集・翻訳、さらに出版は他に例がない事業であり独創的であり、当該分野への貢献度を高く評価するものである。今年度も昨年度に引き続き法令集シリーズを出版した。また、研究成果の発信も速やかに実施している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修復および国際協力に関する資料の蓄積、本センターの調査研究成果の発信を、および海外での事例の調査を順調に実施することができた。 次年度以降は、より大きな枠組みである文化財保護制度に関する調査研究の一環として、引き続き同様の事業を実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んだ。次年度以降も引き続き文化財保護関連のデータベースに関する調査研究事業を実施していく予定である。また、当研究所でのデータベースの構築についても、法令にとどまらない研究成果発信のツールの構築に取り組む予定である。

業務実績書

研究所 No.62

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化財情報電子化の研究に基づくデータベースの充実 (①) -④)		
【事業概要】 文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 難波洋三
【スタッフ】 森本 晋[企画調整部]			
【主な成果】 文化財情報電子化の研究を通じて、GIS を活用した文化遺産情報の取得・管理に関する最新の手法を開発するとともに、研究成果を学会で発表ならびに公刊することにより学界に寄与している。開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても文字コードを Unicode 化して将来の多言語化に備えるとともにデータの充実を図った。また、新規に図面画像データベースを構築した。			
【年度実績概要】 1. 文化財情報電子化の研究 遺跡・遺物情報電子化の実態調査として、遺跡公園での遺構情報の提示方法を鳥取県むきばんだ史跡公園で調査した。遺跡・遺物情報電子化の資料調査として関連学会の中でも重要な CAA2010、地球惑星科学連合、Vast2010 に参加するとともに、地理情報システム学会において研究成果の発表を行った。また、研究成果を埋蔵文化財ニュースの1冊として刊行した。 2. 文化財情報データベースの充実 遺跡、図書、写真、報告書抄録、航空写真等のデータベースについてデータの入力・更新をおこなった。データベースの構造の改良として文字コードの Unicode 化を実施するとともに、新規に図面画像データベースを構築した。奈文研所蔵資料の電子化に努め、特にガラス乾板、大判フィルム、航空写真画像のデジタル化を進めた。 3. 遺跡 GIS 研究会の開催 第15回遺跡 GIS 研究会を2010年11月19日、奈文研講堂で開催。発表4件。			
【実績値】 研究会開催件数：1回、参加者数：32名。 研究会発表件数：2件 (①、②) 研究報告刊行：1冊 (③) データベース登録件数 平成22年度末 () 内は平成21年度末の値 全文 211,533 (210,541)、木簡 148,733 (149,376)、図書 228,524 (239,630)、抄録 62,218 (60,289)、写真 276,965 (214,984)、遺跡 439,700 (421,051)、航空写真 1,246,696 (1,222,142) *木簡データベースは資料整理のため、図書データベースはデータ構造の変更のため見掛け上の件数が減少。			
【備考】 ① 森本晋ほか「大規模で構造的な遺構への遺構情報モデルの適用」(『地理情報システム学会講演論文集』2010.10) ② 森本晋「遺物実測図の構造」(第15回遺跡 GIS 研究会、2010.11) ③ 『遺構情報モデルに基づく地理空間データ作成のための製品仕様書』(『埋蔵文化財ニュース』144、2011.3)			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6142

自己点検評価調書

研究所 No. 62

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 奈文研独自のデータベースを整備して研究に資するとともに公開用データベースを充実されている。この点において、一般国民が求める情報を広く継続的に提供しており、情報の正確さを担保しつつ文化財情報電子化の研究を踏まえた質の向上に努めている。これにより上記諸観点を満たしている。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価の各観点において十分な水準を維持していることから総合的にAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでいる。新規データの入力だけではなく、既存のデータの更新も行い、さらに研究用の新規データベースも構築した。全体として当初計画通り進捗しているので順調と判定した。

業務実績書

研究所 No.63

研究報告 No. 66

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	『東京文化財研究所年報』・『東京文化財研究所概要』・『東文研ニュース』の刊行((2)-①)		
【事業概要】 『年報』『概要』『東文研ニュース』など広報三誌の編集・刊行は、研究所が進める広報活動の中核に位置づけられる。それらの目的は媒体に応じて、調査・研究、国際協力の推進、調査研究成果の発信、協力・助言など、研究所が担うさまざまな活動を対外向けに情報発信することにある。またそれらはホームページにおいても PDF ファイル形式のデータとして配信されている。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 勝木言一郎
【スタッフ】 田中 淳, 山梨絵美子, 津田徹英, 塩谷 純, 綿田 稔, 皿井 舞, 江村知子, 土屋貴裕, 城野誠治, 中村明子, 井上さやか, 鳥光美佳子, 中村節子 (以上、企画情報部)			
【主な成果】 『年報』2009 年度版、『概要』2010 年度版、『東文研ニュース』第 41 号-第 44 号、『東文研ニュースダイジェスト』（『東文研ニュース』英語版）第 8 号-第 9 号をそれぞれ刊行し、研究所の情報発信に努めた。			
【年度実績概要】 1. 『年報』2009 年度版の刊行 2009 年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト索引とした。 2. 『概要』2010 年度版の刊行 2010 年度版は構成を改め、組織、職員一覧、東京文化財研究所の役割、各部・センターの紹介、調査と記録、多様な文化財の概念、文化財に関わる材料と技術、環境と文化財、修復する、壁画の調査研究と保護、日本から世界へ、文化財アーカイブの役割、“人”を育てる、連携・交流・公開、情報発信、刊行物、資料とした。またその割付は従来通り、日英 2 カ国語を併記し、図版を多用した。 3. 『東文研ニュース』第 41 号-第 44 号の刊行 『東文研ニュース』の構成は従来通り、四半期ごとの活動報告、コラム、刊行物の案内、新人紹介、人事異動、案内などとした。また『東文研ニュースダイジェスト』（『東文研ニュース』英語版）第 8 号-第 9 号を刊行し、海外に向けた情報発信に努めた。 4. 子供向けパンフレットの刊行 2009 年度に引き続き、子供向けパンフレット『東京文化財研究所ってどんなところ？』の改訂版を刊行し、小学校児童・中学校生徒を対象にした情報発信に努めた。 5. 広報誌の配布先の充実 一般者向けの広報を強化するため、諸施設に対し、『概要』『東文研ニュース』および子供向けパンフレットの配置、配布を依頼した。2010 年度に配布の依頼を行った施設は、東京国立博物館、国立西洋美術館、上野の森美術館、国立科学博物館、国際子ども図書館、東京文化会館、上野動物園、東京都上野公園管理事務所、東部公園緑地事務所、国立東京近代美術館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、貨幣博物館、日本大学文理学部資料館、多摩美術大学美術館などである。			
【実績値】 刊行物数 『東京文化財研究所年報』2009 年度版 1,000 部 『東京文化財研究所概要』2010 年度版 5,000 部 『東文研ニュース』第 41 号・第 42 号・第 43 号・第 44 号 各 5,000 部 『東文研ニュースダイジェスト』第 8 号・第 9 号 各 5,000 部 子供向けパンフレット 10,000 部			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6211

自己点検評価調書

研究所 No. 63

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『年報』『概要』『東文研ニュース』『東文研ニュースダイジェスト』、そして子供向けパンフレットについて、受信者側の視点からその内容の見直しを行い、一般に向けた広報の充実を図った。こうした結果、広報企画事業の適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性が改善された。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	東京文化財研究所に対する地域社会や学校社会での理解の向上を促すために、『年報』『概要』『東文研ニュース』『東文研ニュースダイジェスト』、そして子ども向けパンフレットの効果的な配置・配布のあり方を見直し、一般に対する普及に努めた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『平成 21 年版日本美術年鑑』・『美術研究』の刊行 (2)-①
【事業概要】 各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子
【スタッフ】 田中 淳、勝木言一郎、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）、相澤正彦、三上 豊、吉田千鶴子、森下正昭（以上、企画情報部客員研究員）、中野照男（副所長）	
【主な成果】 今年度は『平成 21 年版 日本美術年鑑』及び、『美術研究』401～403 号を刊行することができた。	
【年度実績概要】 ①『平成 21 年版 日本美術年鑑』 B5 版 450 ページ 2008（平成 20）年美術界年史、美術展覧会（企画展、作家展、団体展）、美術文献目録（定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展））、物故者 ②『美術研究』401 号 鄭 于澤（石附啓子訳）「朝鮮王朝時代における釈迦誕生図の図像研究」 塩谷 純「川端玉章の研究（三）」 津田徹英「研究資料 奈良国立博物館蔵 木造南無仏太子立像」 皿井 舞「書評 富島義幸『密教空間史論』」 ③『美術研究』402 号 石守 謙（植松瑞希訳）「夏文彦から雪舟へー『図絵宝鑑』と、十四・十五世紀東アジアにおける山水画の歴史的理解の形成ー」 山梨絵美子「図版解説 平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品についてー《舟》《芍薬》《日清役二龍山砲台突撃図》《林政文肖像》二点ー」 ④『美術研究』403 号 皿井 舞「神護寺薬師如来像の史的考察」 土屋貴裕「『天狗草紙』の作画工房」	
【実績値】 『日本美術年鑑』刊行数 1 点 (①) 『美術研究』刊行数 3 点 (②～④) 『日本美術年鑑』刊行部数 600 部 配布部数 483 部 『美術研究』刊行部数 各 400 部 配布部数 各 380 部	
【備考】 ①『平成 21 年版 日本美術年鑑』東京文化財研究所 11.03 ②『美術研究』401 号 東京文化財研究所 10.08 ③『美術研究』402 号 東京文化財研究所 11.02 ④『美術研究』403 号 東京文化財研究所 11.03	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6212

自己点検評価調書

研究所 No. 64

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	刊行物件数	配布部数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『日本美術年鑑』は、例年よりも多数の展覧会および展覧会図録掲載文献情報を集め、計画通り年度内に刊行できた。ウェブへのデータ公開も一部について試験的に行なうことができた。次年度にさらなる改善をめざしたい。また、『美術研究』においては、従来からの基礎的研究の充実に加え、地域的あるいは時代的に従来の枠を超えた研究が登場するなど、誌面がより一層充実する傾向にあり、この点は評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画にあげた実施状況は、順調である。次年度は、『日本美術年鑑』のウェブへのデータ公開の迅速化を図るとともに、同年鑑創刊以前のデータについても補完をめざしたい。

業務実績書

研究所 No.65

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	『無形文化遺産研究報告』・『無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行 (2)-①
【事業概要】 無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。	
【担当部課】	無形文化遺産部
【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、菊池理予、金子 健、星野厚子（以上、無形文化遺産部）、星野 紘、森下愛子、永井美和子（以上、客員研究員）、松山直子（特別研究員）	
【主な成果】 1) 主として無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第5号の刊行。 2) 平成22年11月18日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第5回無形民俗文化財研究協議会報告書』の刊行。	
【年度実績概要】 ○『無形文化遺産研究報告』第5号を以下の内容で刊行した。 「我が国における工芸技術保護の歴史と現状―染織技術を中心として―」菊池理予、「近・現代の京焼における伝統的意匠の継承―伝統の継承に関する一考察―」森下愛子、「過疎地の伝統芸能の苦闘」星野紘、「無形文化遺産保護条約における Traditional Craftmanship」松山直子、「フィルモン音帯に関する調査報告」飯島満・永井美和子・中山俊介、「〔資料紹介〕浅田正徹採譜楽譜」星野厚子、「〔資料紹介〕梅村豊撮影歌舞伎写真 (三)」金子健 ○「無形の民俗の保護における博物館・資料館の役割」をテーマとした『第5回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。 序にかえて、I. 趣旨説明、II. 報告1:「マーラン船の民俗技術の保護と継承―市民協働の資料館活動―」前田一舟（うるま市立海の文化資料館学芸員）、報告2:「築27年目の「再開館」―芸北民俗芸能保存伝承館の試行錯誤―」六郷寛（北広島町教育委員会生涯学習課課長補佐）、報告3:「生活文化伝承のために博物館ができること・できないこと―「体験博物館」がめざす先―」榎美香（千葉県立房総のむら上席研究員）、報告4:「氷見の獅子舞―天狗が獅子を殺して祭りが終わる―」小境卓治（氷見市立博物館長）、報告5:「田園空間博物館における伝統芸能の保存・継承―ひみ獅子舞ミュージアムの活動について―」鈴木瑞麿（氷見市産業部農林課田園・漁村空間整備推進班）、III. 総合討議、IV. 参考資料、V. アンケート結果	
【実績値】 発行数 2件 発行部数 1,250部（『無形文化遺産研究報告』750部、『無形民俗文化財研究協議会報告書』500部）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6213

自己点検評価調書

研究所 No. 65

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	発行数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『無形文化遺産研究報告』：無形文化遺産をめぐる論考や報告、資料紹介等、幅広い内容の報告書となった。本誌は、将来の無形文化遺産全般の保護行政や研究に資する報告書となることをめざしているが、その目的に適うものとなっている。 『無形民俗文化財研究協議会報告書』：当研究所でおこなった無形民俗文化財に関する研究協議会の報告書で、会場での研究報告や総合討議の様相を掲載したものである。今後もこれまでの研究を踏まえながら、協議会をおこない、報告書を刊行する予定である。 以上を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	両誌ともに、計画通り、年1回の刊行がなされ、目的を順調に達成した。今後もこのペースの維持をめざす。

業務実績書

研究所 No. 66

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	『保存科学』 50号の出版 (2)-①)		
【事業概要】 保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究に基づく資料の作成・公開を目的とし、年1回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告などを掲載する。また、より一層の研究成果の公開につとめるため、『保存科学』掲載論文の電子化を行い、インターネット上での公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 川野邊 渉（保存修復科学センター）、清水真一（文化遺産国際協力センター）、吉田直人（保存修復科学センター）（編集担当）			
【主な成果】 投稿された25本の原稿の内容について、専門家による査読を実施し、最終的に報文6本、報告17本、合計23本の掲載を決定した。本誌の体裁は変更せず、総ページ数244、650部印刷、関係諸機関に約580部配布した。			
【年度実績概要】 保存修復科学センター長、副センター長、文化遺産国際協力センター長、東京国立博物館学芸研究部保存修復課長・神庭信幸氏、東京藝術大学大学院美術研究科教授・稲葉政満氏の5名からなる編集委員会によって編集を行った。平成22年度は、23件の研究論文・報告を掲載した『保存科学』第50号を発行した。その中で6件の報文の題目を以下に記す。 1. 収蔵庫内の温湿度環境とスチール棚の表面温度 2. 動的解析による高松塚古墳の損傷要因の検討 3. 闘鶏山古墳の石槨内部発掘調査時の空調制御方法に関する研究 4. Simulation Analysis on the Drying Process of Tuff Breccia Stone Composing Stone Chamber of Takamatsuzuka Tumulus 5. 日本における覆屋の歴史について 6. 諸外国における文化財の把握と輸出規制の概要 その他、17件の報告を掲載した。			
【実績値】 刊行数 1件 (①) 印刷部数 650部 配布部数 約580部 本誌体裁 B5、総ページ数 224ページ			
【備考】 ①「保存科学」第50号			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6214

自己点検評価調書

研究所 No. 66

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考 今回掲載した23本の報文や報告は、最新の調査や研究結果を公表するためのものであり、速報的な意味合いを持つものも少なくない。掲載には専門家による厳正な査読を経る必要があり、その内容が十分精査されたものののみを取り上げている。これは、水準以上のレベルを維持するために不可欠なことである。						

2. 定量的評価

観点	印刷部数	掲載論文数				
判定	A	A				
備考 掲載報文、報告数は計23本と多く、今年度の成果の充実ぶりを示すものである。印刷部数は650部と、国内外の多くの研究機関などに配布していることを反映している。また、各報文、報告はPDF化し、インターネット上で公開しており、非常に好評である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	非常に質の高い報文と報告が多く掲載され、刊行物として、またインターネットでの公開を通じて、国内外の研究者にとって重要な情報源として確立している。今後も現在の方法での公開を継続していきたいが、インターネット公開に関しては、もっと周知する方法を検討する必要があると考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昭和38年度の第1号以来、確実に刊行を重ねており、今号で50号を数えた。調査研究の成果は公開すべきとの原則のもと、今後もこれまで以上の充実を目指していきたい。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	第33回文化財の保存および修復に関する国際研究集会報告書の刊行 ((2)-①)
【事業概要】 2009年11月12日～14日に東京国立博物館平成館大講堂にて開催した第33回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「日本絵画の修復」の報告書を刊行する。	
【担当部課】	保存修復科学センター
【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 中山俊介、北野信彦、加藤雅人、早川典子、森井順之（以上、保存修復科学センター）	
【主な成果】 第33回文化財の保存・修復に関する国際研究集会「日本絵画の修復」の報告書（A5、カラー口絵8ページ、本文（和文・英文）460ページ、印刷部数800部）を作成し、刊行した。また、集会参加者および国内外の関係機関に配布した。	
【年度実績概要】 以下の内容で報告書を刊行した。和文：「日本における絵画修理の理念」鬼原俊枝、「日本絵画修復における自然科学の役割」川野邊渉、「大英博物館における日本絵画の保存修復」杉山恵助、「クリーブランド美術館における東洋絵画修復」ジェニファー・ペリー、「東京文化財研究所事業『在外日本古美術品の修復協力プロジェクト』における海外工房での修復」中山俊介、「材料からみた和紙の歴史的変化」大川昭典、「和紙の保存性」稲葉政満、「補紙・補絹の動向」加藤雅人、「絵画修復に使われる糊と布海苔」早川典子、「日本の膠」森田恒之、「修復における新たな試み」田畔徳一、「新しい材料と新しい技術－科学の裏づけと技術者の選択－」山本記子、「フリーア美術館における科学的研究と絵画の保存修復」ブライス・マッカーシー、「ボストン美術館における日本絵画コレクションの保存修復と科学分析」ジャッキー・エルガー、「伝統を継承する先端施設の取り組み－九州国立博物館の場合－」本田光子、藤田励夫、志賀智史。英文：Kihara Toshie, Principles of the restoration of paintings as cultural property established in Japan / Kawanobe Wataru, The role of science in the restoration of Japanese paintings / Sugiyama Keisuke, Conservation of Japanese paintings at The British Museum in London / Jennifer Perry, The Conservation of East Asian Paintings at the Cleveland Museum of Art / Nakayama Shunsuke, Conservation of Japanese paintings in an overseas studio / Okawa Akinori, Historical changes in the varieties of washi / Inaba Masamitsu, The durability of washi / Kato Masato, Trends in infilling paper and infilling silk / Hayakawa Noriko, Nori and funori for the restoration of Japanese paintings: Starch paste, aged paste and seaweed paste / Morita Tsuneyuki, Nikawa: Animal glue in Japan / Taguro Tokuichi, Collaboration of traditional techniques and science technology for the restoration of Japanese paintings / Yamamoto Noriko, New materials and new techniques: Scientific support and the restorers' choice / Blythe McCarthy, The tradition of scientific research and paintings conservation at the Freer Gallery of Art / Jacki Elgar, Conservation and scientific analysis of the Japanese painting collection at the Museum of Fine Arts, Boston / Honda Mitsuko, Fujita Reio and Shiga Satoshi, Work of a contemporary facility transmitting tradition: Case of the Kyushu National Museum	
【実績値】 報告書 1件 (①)	
【備考】 ①「Restoration of Japanese Paintings –Advanced Technology and Traditional Techniques / 日本絵画の修復－先端と伝統」、468 pp、11.3	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6215

自己点検評価調書

研究所 No. 67

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	報告書数	印刷部数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会参加者が多かったため報告書の印刷部数も多くなったが、限られた予算内で、必要かつ十分な部数を印刷した。また、参加者から要望が寄せられた日本語も併せて掲載することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度内に予定通り刊行した。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6221

業務実績書

研究所 No.68

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	研究報告書、年報、研究論文集、図録等の刊行 ((2) —①)		
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を平成 18 年度の実績以上刊行する。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 田辺征夫
【スタッフ】			
【主な成果】 紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を順調に刊行できた。			
【年度実績概要】 (紀要等) 『奈良文化財研究所紀要 2010』 2010. 6 月刊、3, 000 部 『奈良文化財研究所概要 2010』 2010. 9 月刊、3, 500 部 (ニュース) 『奈文研ニュース』 NO. 37, 2010. 6 月刊、3, 000 部、『奈文研ニュース』 NO. 38, 2010. 9 月刊、3, 000 部 『奈文研ニュース』 NO. 39, 2010. 12 月刊、3, 000 部『奈文研ニュース』 NO. 40, 2011. 3 月刊、3, 000 部 『埋蔵文化財ニュース』 NO. 142 (カンボディア・アンコール遺跡群の調査と国際協力)、2011. 3 月刊、3, 500 部 『埋蔵文化財ニュース』 NO. 143 (文化財の最新イメージング技術)、2011. 3 月刊、2, 500 部 『埋蔵文化財ニュース』 NO. 144 (遺構情報モデルに基づく地理空間データ作成のための製品仕様書)、 2011. 3 月刊、3, 000 部、 『埋蔵文化財ニュース』 NO. 145 (2009 年度埋蔵文化財関係統計資料)、2011. 3 月刊、2, 500 部			
【実績値】 目標値 (平成 18 年度実績) は、紀要等 2 種、ニュース 2 種 8 点、計 10 点の刊行			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6221

自己点検評価調書

研究所 No. 68

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			
備考 適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。 継続性：継続的な定期刊行物として刊行出来た。 正確性：調査報告としての正確性は十分であった。						

2. 定量的評価

観点	紀要等刊行数	ニュース刊行数				
判定	A	A				
備考 紀要、概要、ニュースの刊行数は、目標値を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	紀要等2点、ニュース2種8点を刊行し、研究成果を順調に刊行できたことでAと判定した。次年度も、本年度にまして、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を、専門家だけでなく、一般向けにも分かりやすい形での刊行に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	紀要、概要、ニュースの刊行は順調に実施出来た。次年度は、公表方法の検討も含めて刊行の充実を図る。

業務実績書

研究所 No. 69

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会 ((2) - ②)
【事業概要】 第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会は、「復興」と文化遺産」をテーマに、文化遺産国際協力センターの担当で開催した。本研究集会では、災害や紛争後の復興過程、あるいは政治体制や社会状況の変化といった様々な局面において文化遺産がどのように扱われ、その保存や修復にどのような意図が込められ、そこで文化遺産が社会に対してどのような役割を果たしてきたのか、といった文化遺産と社会とのかかわりについて、具体的な事例の分析を通じて改めて考察することを目標とした。	
【担当部課】	文化遺産国際協力センター
【プロジェクト責任者】	文化遺産国際協力センター長 清水真一
【スタッフ】 友田正彦、岡田 健、山内和也、朽津信明、二神葉子（以上、文化遺産国際協力センター）	
【主な成果】 平成23年1月19日（水）～21日（金）、東京国立博物館において、第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会「復興」と文化遺産」を開催した。	
【年度実績概要】 基調講演では、海外と日本の事例に即しながら考察の鍵となる要点の提示が行われた。 第1セッションは「災害からの復興」がテーマで、イタリア、中国、日本における震災復興プロセスにおける文化財をめぐる事例報告が行われた。 第2セッションは「紛争からの復興」がテーマで、いずれも紛争からの国家再建過程にあるアフガニスタン、ボスニア、西バルカン諸国、カンボジアの文化財保護に関する報告が行われた。 第3セッションは「社会変化の中での復興」をテーマとし、旧東ドイツ、ロシア、ブータン、日本における近年の社会変化と文化財保護をめぐる状況が紹介された。 以上のセッションごとに論点整理のディスカッションを行い、最後に講演者の代表による総合討議を行った。 各講演および討議の内容については、次年度の報告書作成に向けて、テープ起こし等の作業を行った。 海外招聘者 10名（基調講演者1名（イタリア）、セッション講演者9名（イタリア、中国、アフガニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、アルバニア、カンボジア、ドイツ、ロシア、ブータン）） 国内招聘者 5名（基調講演者1名、セッション議長3名、セッション講演者1名）	
【実績値】 シンポジウム開催 1回 (①) 参加者 のべ347名（講演者および主催関係者を含む3日間の総数）	
【備考】 ①東京文化財研究所主催・第34回文化財の保存および修復に関する国際研究集会 「復興」と文化遺産」11.01.19～21、東京国立博物館平成館大講堂 ②予稿集 300部	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6222

自己点検評価調書

研究所 No.69

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	開催回数	印刷物				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シンポジウムを予定通り開催し、国内外専門家についても当初の企画・人選が予定通り実現したことに加え、文化庁外国人芸術家・文化財専門家招へい事業や渡航経費自己負担での参加も得てさらに充実することができた。講演内容は事前の打ち合わせを踏まえて開催趣旨によく沿ったものとなり、それぞれが非常に興味深く、参加者の満足度も高かった。外国人専門家からは、復興という局面を文化遺産の切り口からテーマとして取り上げたこと自体が新鮮だったとの評価も得られた。平日・3日間の開催ということで参加登録がやや少なかったのが残念であったが、内容については十分に当初の目的を達成したと自負している。来年度は報告書を作成し、今回の成果をさらに広く普及・活用に供する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国際研究集会の開催を通じて、国内外に向けた文化遺産研究に関する情報発信を促進することが出来た。今回は基本的に専門家を対象に設定したが、テーマによってはより広く一般に広報を行うことも検討に値する。次年度の報告書出版を通じて、成果の発信をさらに促進したい。

業務実績書

研究所 No. 70

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	平成22年度オープンレクチャー ((2)-②)		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	企画情報部長 田中 淳
【スタッフ】 山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕（以上、企画情報部）			
【主な成果】 第44回企画情報部オープンレクチャー「人とモノの力学」と題して4講演を2日間にわたり開催した（参加者数：200人、アンケートによる満足度：84%（回収率：68%）。			
【年度実績概要】 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で44回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。今回も昨年度に引き続き「人とモノの力学」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても位置づけられている。 今回は2日間でのべ200人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、136人から回答を得た（回収率：68%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」55人、「おおむね満足した」59人、「普通だった」5人、「不満が残った」1人、無回答17人、回答者の84%が満足感を得たことがわかった。 第1日：2010年10月15日（金）午後1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室 「中世における真宗祖師先徳彫像の制作を廻って」津田徹英（東京文化財研究所） 「草花の美-都久夫須麻神社社殿の空間-」須賀みほ（岡山大学） 第2日目：2010年10月16日（土）午後1:30～4:30、東京文化財研究所セミナー室 「御歌所の歌人と書」高橋利郎（成田山書道美術館） 「秋元洒汀と明治の日本画」塩谷純（東京文化財研究所）			
【実績値】 参加者数：200人 満足度：84%（回収率68%）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6223

自己点検評価調書

研究所 No. 70

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財に関する調査・研究に基づく成果・新発見を、時宜に適応しながら、公表することができ、その参加者数も満足度も目標値を満たしたので、Aと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り、進捗した。次期中期計画においても文化財に関する調査・研究に基づく成果・新知見を、公開講演というかたちで開催していきたい。

業務実績書

研究所 No.71

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催（（２）－②）		
【事業概要】文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。			
【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成 研究支援課長 紅林孝彰
【スタッフ】永井あつ子、車井俊也、今西康益、宮本隆行、飯田信男〔以上、研究支援推進部〕			
【主な成果】公開講演会を２回、特別講演会（東京会場）を２回、飛鳥資料館特別展示記念講演会を２回、平城宮跡資料館特別展示等記念講演会を２回、計８回の公開講演会を開催した。 また、発掘調査に伴う現地説明会等を平城地区、飛鳥藤原地区あわせて計５回実施した。 このことにより調査研究成果を適時適切に国民に公開公表することが出来た。 開催回数は目標値を超え、さらに参加延べ人数は、公開講演会等が２,０３３名、現地説明会等が３,８４３名に上り、事業は順調に実施できた。			
【年度実績概要】			
Ⅰ．公開講演会等			
１．第１０６回公開講演会 H22/6/12(土) 参加者数 222 人 場所:平城宮跡資料館講堂 講演者数 4 人アンケート結果= 回収数 133 人、回収率 59.9%、満足度 A=129 人(97%)/B=4 人(3%)/C=0 人			
２．第 107 回公開講演会 H22/11/13(土) 参加者数 206 人 場所:平城宮跡資料館講堂 講演者数 3 人アンケート結果=回収数 136 人、回収率 66%、満足度 A=135 人(99.3%)/B=1 人(0.7%)/C=0 人			
３．特別講演会（東京会場）H22/5/15(土) 参加者数 409 人 場所:江戸東京博物館 講演者数 3 人アンケート結果=回収数 255 人、回収率 62.3%、満足度 A=252 人(98.8%)/B=3 人(1.2%)/C=0 人			
４．特別講演会（東京会場）H22/9/25(土) 参加者数 526 人 場所:有楽町朝日ホール 講演者数 6 人アンケート結果=回収数 282 人、回収率 53.6%、満足度 A=281 人(99.6%)/B=1 人(0.4%)/C=0 人			
５．飛鳥資料館春期特別展示「キトラ古墳壁画四神」特別公開記念講演会 H22/5/30(日) 講演者数 2 人、加者数 150 人 場所:明日香村立中央公民館ホール			
６．飛鳥資料館秋期特別展示記念講演会 H22/10/17(日) 参加者数 47 人 場所:飛鳥資料館講堂 講演者数 1 人アンケート結果= 回収数 34 人、回収率 72%、満足度 A=34 人(100%)/B=0 人/C=0 人			
７．平城宮跡資料館秋期特別展示記念講演会 H22/10/9(土) 参加者数 202 人 場所:講堂 講演者数 4 人 アンケート結果=回収数 136 人、回収率 67.3%、満足度 A=113 人(83.1%)/B=20 人(14.7%)/C=3 人(2.2%)			
８．平城宮跡資料館冬期企画展示記念講演会 H22/12/19(日) 参加者数 271 人 場所:講堂 講演者数 3 人アンケート結果=回収数 163 人、回収率 60.1%、満足度 A=158 人(96.9%)/B=5 人(3.1%)/C=0 人			
Ⅱ．発掘調査現地説明会等			
１．平城第 466 次(平城宮東方官衙地区)666 m ² 、発掘調査現地説明会 H22/4/17(土)、参加者 750 人、報告者 2 人 アンケート結果=回収数 260 人、回収率 34.7% 満足度 A=145 人(55.8%)/B=102 人(39.2%)/C=13 人(5.0%)			
２．飛鳥藤原第 163 次(藤原宮朝堂院) 1,500 m ² 、発掘調査現地説明会 H22/7/3(土)、参加者 423 人、報告者 1 人 アンケート結果=回収数 68 人、回収率 16.1% 満足度 A=41 人(60.3%)/B=27 人(39.7%)/C=0 人			
３．平城第469次(平城宮跡東院地区西北部) 850m ² 、発掘調査現地説明会 H22/7/17(土)、参加950人、報告1人 アンケート結果=回収数 159 人・回収率 16.7% 満足度 A=81 人(50.9%)/B=75 人(47.2%)/C=3 人(1.9%)			
４．飛鳥藤原第 165 次調査(水落遺跡) 287 m ² 、現地見学会 H22/12/5(日)、参加者 1,420 人			
５．平城第 477 次(春日東塔院)219 m ² 、発掘調査現地見学会 H22/12/17～21、参加者 300 人			
【実績値】			
Ⅰ．公開講演会等 年 8 回開催（目標値は年 6 回） 聴講者延人数 2,033 人、アンケート回収数 1,139 人、回収率 56% 満足度 A=1,102 人(96.8%)/B=34 人(3.0%)/C=3 人(0.2 %)			
Ⅱ．発掘調査現地説明会等 年 5 回開催（目標値は年 6 回） 参加者延人数 3,843 人内アンケート実施回数 3 回：参加者延数 2,123 人、回収数 487 人、回収率 22.9% 満足度 A=267 人(54.8%)/B=204 人(41.9%)/C=16 人(3.3%)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6224

自己点検評価調書

研究所 No. 71

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 公開講演会 適時性：広く一般に公開し、必要性に答えることが出来た。 独創性：公開は、内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することが出来た。 発展性：聴講者は多数かつ多種にわたり様々な分野への影響が期待される。 継続性：研究成果の継続的な公表、連続的な社会還元が出来た。 正確性：多数が満足する正確性を持った内容であった。						

2. 定量的評価

観点	開催回数	参加者数	参加者満足度			
判定	A	A	A			
備考 公開講演会 開催回数は目標値の 1.3 倍を達成した。聴講者数は、昨年度(1,018 人)に対して 2 倍となった。 9 割強の方に満足していただいた。 現地説明会等 開催回数は目標値を下回ったが、9 割強の方に満足していただいた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	公開講演会については、年 8 回実施し、発掘調査現地説明会等については、5 回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対し行ったアンケートでは、公開講演会で 99.8%、発掘調査現地説明会等で 96.7%の「大変満足である」又は「おおむね満足である」という結果を得ている。 これらの結果を総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会の開催回数は目標値を超え、現地説明会等の開催は目標値を達成し、この事業が順調に実施できたと考える。 今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握等に力を注ぎ、さらに参加者数の増加と満足度の向上に努めたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6231

業務実績書

研究所 No.72

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	ホームページの運用((2)-③)		
【事業概要】 研究所の研究・業務等を広報するためホームページの充実を図り、ホームページアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 勝木言一郎
【スタッフ】 綿田 稔, 土屋貴裕, 中村明子 (以上、企画情報部), 崎部 剛 (管理部 LAN 委員), 俵木 悟 (無形文化財部 LAN 委員), 犬塚将英, 森井順之 (以上、保存修復科学センターLAN 委員), 二神葉子 (文化遺産国際協力センターLAN 委員)			
【主な成果】 文化財デジタルイメージギャラリーの新設、メールマガジンの配信など、ホームページの内容の充実に努め、研究所の情報発信機能の向上を図った。			
【年度実績概要】 1. ホームページの運用 東京文化財研究所のホームページは、研究所における情報発信機能の一翼を担う重要なメディアであり、また文化財研究のデジタル・アーカイブとしての役割を果たす。 平成 22 年度は文化財デジタルイメージギャラリーを新設し、メールマガジンを配信するなど、ホームページの内容の充実と利便を図った。とくに文化財デジタルイメージギャラリーでは「赤外線的眼で見る《昔語り》」「菊花に覆われた未完の武者絵」「国宝彦根屏風の共同調査」「古写真 名古屋城本丸御殿」を公開し、画像を中心とするデジタル・アーカイブの構築に努めた。 平成 22 年度のホームページアクセス件数は 1,489,091 件であり、昨年度に比べ、71,888 件増加した。			
【実績値】 ホームページアクセス件数 : 1,489,091 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6231

自己点検評価調書

研究所 No. 72

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	ホームページ アクセス件数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ホームページの運用については、ホームページアクセス件数の高さから、適時性、独創性、発展性、効率性、継続性、正確性の向上を裏付ける結果だと判断した。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ホームページの運用については、ホームページが研究所の広報活動の一翼を担うとともに、かつ文化財研究のデジタル・アーカイブとして多角的な情報発信を行ってきたことがホームページアクセス件数からも裏付けられた。こうした実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると判断した。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6232

業務実績書

研究所 No. 73

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	ホームページアクセス件数の前期中期計画期間の年度平均以上の確保 ((2) - (3))		
【事業概要】 研究所の事業・研究成果をはじめ、施設・案内など様々な広報をしているホームページであり、常に拡充を図っている。社会への広報の目安となるアクセス件数を把握し、より一層の情報提供に務める。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 渡 勝弥（文化財情報係長）ほか1名			
【主な成果】 研究所のホームページをより充実させるために、各部・室における事業内容、研究発表等を紹介するページを公開した。また、奈文研のホームページをより見やすいものにするために東文研の協力を得て、文化財研究所として類似性のあるホームページの作成を開始した。 木簡人名データベース（試作版）を公開した。			
【年度実績概要】 各部・室及び各研究員のページを作成することによって、奈文研の事業内容や研究内容、研究発表等をより明らかに公開することが可能となった。 木簡人名データベース（試作版）により、木簡に現れる人名を検索することが可能であり、将来的には木簡の詳細情報が閲覧できることを目指している。			
【実績値】 ホームページ閲覧件数：4,977,076 件 ホームページアクセス者数：641,695 人			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6232

自己点検評価調書

研究所 No. 73

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性:より詳細な情報を公開することが可能となった。 発展性:従来の部単位で紹介から研究員単位にまで紹介が可能となった。 継続性:随時更新することによって情報を継続して公開している。 正確性:各部・室、研究員のページを作成することで、研究所を網羅的に理解することが可能となった。						

2. 定量的評価

観点	ホームページの アクセス件数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来の部単位までのホームページから、研究者単位までのホームページを公開することが可能となった。より詳しく奈文研の紹介が可能となった。今後の目標としては、奈文研トップページの更新と供に、各部・室のページのより一層な充実を図る。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	データベースの追加と各部・室のホームページを公開したことにより、更なる情報の提供が可能となったと認められるため、今年度中期計画の実施状況は順調と判断した。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6311

業務実績書

研究所 No. 74

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	黒田記念館における作品の展示公開 ((3))		
【事業概要】 当研究所は、黒田清輝の芸術を顕彰するために黒田記念館において作品や資料、研究成果を公開するとともに、地方文化の振興に資するために、昭和52年からの事業として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において共催している。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子
【スタッフ】 田中 淳、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞 (以上、企画情報部)			
【主な成果】 一般公開入場者 18,458 人 「写真に見る黒田清輝の日常」(黒田記念館一階64インチ大型タッチパネル、10.11.03 公開開始) 「近代洋画の巨匠 黒田清輝展」(岩手県立美術館、10.07.17-08.29) 入場者 11,942 人			
【年度実績概要】 ①一般公開(無料):毎週木・土曜日 午後1時～4時、特別公開:2010(平成22)年11月3日～11月7日、入場者数 18,458 人(2010年4月1日～2011年3月10日) なお、黒田記念室のパンフレット(A4サイズ、三つ折)を作成し、来館者に無料で配布した。 また、黒田家遺族から受贈した黒田清輝関連写真の調査研究の成果の一部として「写真で見る黒田清輝の日常」と題するデジタルコンテンツを作成し、記念館1階にあらたに設置した64インチ大型タッチパネル上で公開した(11月3日公開開始)。 ②2011年2月24日から3月10日まで、来館者にアンケートを実施した(19日まで実施予定であったが、3月11日に発生した東北地方巨大地震により12日から休館)。来館者917人のうち、156人の回答を得た。回答率は17.0%で、そのうち「満足した」「おおむね満足した」と回答してものは155人(99.4%)、「不満が残った」1人(0.6%)であり、アンケート回答の99.4%が満足感を得たことになる。 ③平成22年度地方共催展は下記のように開催した。 会場:岩手県立美術館、会期:2010年(平成22)年7月17日(土)～8月29日(日) 主催:東京国立博物館、東京文化財研究所、岩手県立美術館、黒田清輝展実行委員会 開催日数:38日、入場者:11,942人、陳列点数:油彩・パステル画85点、素描62点、写生帖17冊、書簡4通、日記5冊、参考出品2点、記録写真16点、特別陳列(油彩2点、素描3点)(以上、黒田記念館所蔵作品) 図録:A4版変形、182ページ、 会期中の2010(平成22)年8月1日(日)、会場出口において来館者にアンケート調査を実施し、280人から回答を得た(入館者数300人に対して、回収率93.3%)。満足度として「満足」、「おおむね満足」の回答が、100%をしめた。 ④作品貸与:1件1点 黒田清輝「風景(グレー)」(油彩画):「セーヌの流れに沿って」展(ブリヂストン美術館、10.10.30-12.23、ひろしま美術館 11.1.3-2.27) 1件1点			
【実績値】 黒田記念館 アンケート、同集計表 入場者の満足度:99.4% 共催展:岩手県立美術館 入場者 11,942人 入場者の満足度:100% 作品貸与件数:1件1点			
【備考】 黒田記念館 アンケート、同集計表 共催展 アンケート集計表			

【書式B】
(様式2)施設名 東京文化財研究所
自己点検評価調書

処理番号 6311

研究所 No. 74

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	黒田記念館 入館者数	同記念館 入館者満足度	共催展 入場者数	同入場者 満足度	作品貸与数	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田記念館の公開、共催展開催、作品の貸与、および黒田記念館における研究成果公開ともに順調に行うことができた。記念館での展示を条件に昨年度寄贈された作品の展示公開も、共催展、平常陳列で行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って事業を進めることができた。今後も、建物と作品および調査研究が一体化した展示公開を目指していきたい。黒田記念館の作品を多くの国民に鑑賞していただくため、各地の美術館との共催による黒田清輝展も継続していきたい。画像等のウェブ上での公開等、より広く研究成果を公開できるかたちを考えていく方針である。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開（Ⅰ 6（5）「平城遷都 1300 年記念事業」と一体で実施）（（3））		
【事業概要】 平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所がおこなう平城宮・京の発掘調査および研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 難波洋三
【スタッフ】 加藤真二、渡邊淳子、森先奈々子[以上、企画調整部]、車井俊也[研究支援推進部]			
【主な成果】 平城遷都 1300 年記念事業に合わせて資料館をリニューアルオープンし、常設展示の大幅な展示替えをおこなった。また、3 回の企画展と 1 回の特別展を開催し、調査研究の成果公開や情報発信に努めた。			
【年度実績概要】 平城宮跡資料館における展示 ＜常設展＞ 平城宮跡やその発掘調査の概要をわかりやすく解説したガイダンスコーナー、宮内の役所や宮殿の内部を実物大ジオラマと映像で再現した宮殿・官衙復原コーナー、発掘調査で出土した遺物を展示する出土遺物コーナーで展示を構成した。 ＜企画展＞ ○夏期企画展「平城宮跡 今・昔－岡田庄三写真展－」（7 月 10 日から 8 月 31 日） 平城宮跡を半世紀にわたり撮影してきた地元写真家岡田庄三氏の写真展。昭和 30 年代の宮跡の写真と現在の姿を比較した。 アンケート 回収数：789 名 回収率：2% 満足度（良以上）：554 名 79% ○秋期特別展 平城宮跡発掘調査 50 周年記念「天平びとの声をきく－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて」（9 月 25 日から 11 月 7 日） 当研究所の平城宮跡発掘調査 50 周年を記念し開催した特別展。平城宮および周辺の主要な出土木簡約 300 点を一堂に展示した。 アンケート 回収数：972 名 回収率：1% 満足度（良以上）：788 名 87% ○冬期企画展「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」（11 月 26 日から 1 月 17 日） 国土地理院近畿地方測量部との合同主催企画。平城京を地理と測量の視点から読み解く展示をおこなった。 アンケート 回収数：177 名 回収率：1% 満足度（良以上）：141 名 80% ○春期企画展「発掘速報展 平城 2009・2010」（2 月 19 日から 5 月 8 日） 当研究所が 2009・2010 年度に平城宮・京で実施した発掘調査の速報展。9 地点の調査成果を紹介した。			
			
		秋期特別展 展示風景	
【実績値】 常設展の公開日数：143 日 常設展の入館者数：189,338 名 企画展の公開日数：170 日 企画展の入館者数：165,008 名 春期企画展「平城宮跡 今・昔」53 日 38,443 人 秋期特別展「天平びとの声をきく」42 日 92,394 人 冬期企画展「測る、知る、伝える－平城京と文化財－」40 日 20,282 人 春期企画展「発掘速報展 平城 2009・2010」35 日（3 月 31 日現在） 13,889 人			
【備考】 企画展に因んで図録・リーフレット・パンフレットなどの刊行物の作成、記念講演会・ギャラリートークを開催した。 秋期特別展 図録：平城宮跡発掘調査 50 周年記念『天平びとの声をきく－地下の正倉院・平城宮木簡のすべて』（2010.9） 記念講演会：2010.10.9 於 平城宮跡資料館講堂 参加人数：202 名 満足度（良以上）：83.1% ギャラリートーク：2010.10.3、10.17、10.31 冬期企画展パンフレット：『測る、知る、伝える－平城京と文化財－』（2010.11） リーフレット：『文化財を測る、知る、伝える の最前線－空間情報科学と測量・計測技術を用いた文化財研究－』（2010.11） 記念講演会：2010.12.19 於 平城宮跡資料館講堂 参加人数：271 名 満足度（良以上）：96.9% 屋外測量体験：2010.12.19 於平城宮跡 参加人数：80 名 春期企画展パンフレット：『発掘速報展 平城 2009・2010』（2011.2） ギャラリートーク：会期中毎週金曜日			

【書式B】
(様式2)

奈良文化財研究所

処理番号

6312

自己点検評価調書

研究所 No. 75

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
判定	S	A	A			
備考 適時性：平城遷都 1300 年祭という平城宮跡がメイン会場となる一大イベントの開催にあわせて資料館をリニューアルオープンし、例年の 4 倍におよぶ入館者があった。 独創性：資料館リニューアルにあたり、ジオラマや映像など解りやすい新しい展示手法を取り入れた。各種企画展では、展示内容・展示方法ともに趣向を凝らしオリジナリティをだした。 継続性：ほぼ年間を通じて数多くの企画展を開催し（計 4 回）、平城宮・京に関わる様々な内容を入館者に提供することができた。						

2. 定量的評価

観点	公開日数	入館者数	入館者の満足度			
判定	S	S	A			
備考 当該年度は、「平城遷都 1300 年祭」が開催され、平城宮跡資料館がリニューアルオープンし、例年に比べ入館者数、企画展の開催回数などが大幅に増加している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	平城宮跡資料館をリニューアルオープンさせ、33 万人を超える入館者があった。また年間、4 回にわたる企画展を実施し満足度も高かったことから、S と判定した。この状況を引き続き維持できるよう、次年度以降も展示の充実をはかりたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	リニューアルした平城宮跡資料館で、平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所がおこなう平城宮・京の発掘調査および研究の成果公開や情報発信をおこなうことができた。特に本年は、平城宮跡内で平城遷都 1300 年祭が開催されていたこともあり、例年の 4 倍におよぶ入館者を獲得できた。また多数の来場に応えるべく、企画展も多く実施し好評を得た。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開 (3)
【事業概要】 飛鳥資料館において特別展を春秋の2回開催するとともに、企画展を開催する。春期特別展では、キトラ古墳壁画の特別公開をあわせておこなう。平常展示では、第1、第2展示室の展示の維持管理をおこなうとともに、展示の手直しを適宜おこなう。	
【担当部課】	飛鳥資料館
【プロジェクト責任者】	学芸室長 加藤真二
【スタッフ】 成田聖、丹羽崇史（以上、飛鳥資料館）	
【主な成果】 春期特別展「キトラ古墳壁画四神」を4月16日から6月13日まで開催するとともに、期間中の5月15日から6月13日までキトラ古墳壁画の特別公開をおこない、四神図（青龍・白虎・朱雀・玄武図）を展示した。また、5月30日には記念講演・討論会を文化庁とともに主催した。夏期企画展は7月1日から8月30日に「小さな石器の大きな物語」を開催した。秋期特別展は、10月16日から11月28日に「木簡黎明－飛鳥に集う いにしへの文字たち」を開催、10月17日に記念講演会、10月23日、11月6日、20日にギャラリートークをおこなった。冬期企画展は、1月28日から2月28日に「飛鳥の考古学2010」を開催した。平常展では、キトラ古墳壁画の陶板による実寸複製品を設置するとともに、キトラ古墳に関わる展示を一新、充実した。	
【年度実績概要】 春期特別展「キトラ古墳壁画四神」（4月16日から6月13日） キトラ壁画の特別公開のまとめと位置づけて開催した。期間中、キトラ古墳壁画特別公開（5月15日から6月13日）を行い、四神図（青龍、白虎、朱雀、玄武）を展示した。また、記念講演・討論会（5月30日）を文化庁とともに開催した。 夏期企画展「小さな石器の大きな物語」（8月1日から8月30日） 奈文研が研究に参与している河南省靈井遺跡の出土品の写真を中心に、東アジア各地の細石刃に関わる出土品と写真を展示し、更新世末期における東アジアの人類集団の動向を示した。期間中に、河南省より3人の研究者を招へいし、学術交流をおこなった。 秋期特別展「木簡黎明－飛鳥に集う いにしへの文字たち」（10月16日から11月28日） 奈文研が所蔵する飛鳥藤原地区出土の木簡を中心に、日本全国より日本において木簡が使われ始めた7世紀の木簡を集めて展示を行い、黎明期の木簡に関する研究の最前線を示した。10月17日には寺崎保広奈良大学教授を講師として、記念講演会『7世紀木簡のおもしろさ』、10月23日、11月6日、20日には学芸室ほかによるギャラリートークをおこなった。 冬期企画展「飛鳥の考古学2010」（1月28日から2月28日） 平成21年度に、飛鳥地域でおこなった奈文研、明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所の発掘調査のうち、興味深い成果が得られたものについて展示した。檜前遺跡群、飛鳥京跡、甘樫丘東麓遺跡などを取り上げた。 平常展 キトラ古墳壁画の陶板による実寸複製品を設置し、キトラ古墳に関わる展示も一新、充実した。	
【実績値】 刊行図書：5冊 講演会：2回、ギャラリートーク3回 年間入館者数：133,312人	
【備考】 春期特別展図録『キトラ古墳壁画四神』 秋期特別展図録『木簡黎明－飛鳥に集う いにしへの文字たち』 夏期企画展カタログ『小さな石器の大きな物語』 秋期特別展カタログ『木簡黎明－飛鳥に集う いにしへの文字たち』 冬期企画展カタログ『飛鳥の考古学2010』 春期特別展 記念講演・討論会『キトラ古墳～四神ってなに？～』 秋期特別展 記念講演会『7世紀木簡のおもしろさ』	



春期特別展の状況

【書式B】
(様式2)

奈良文化財研究所

処理番号 6313

自己点検評価調書

研究所 No. 76

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	正確性			
判定	A	A	A			
備考 キトラ古墳壁画の取り外し作業の進行のなかでおこなっており、キトラ古墳壁画の修復作業について国民の理解を得るのにまさに、適時で不可欠な展示となっている。また、春期、夏期の各展覧会は強い国際性を有するとともに、秋期展では、おそらく全国で初めて、全国の主だった7世紀木簡を集成、展示することができた。これらの展示は、奈良文化財研究所の付設機関であるとともに、飛鳥地域にあるという本資料館の特性と発想が生んだ独創的なものである。正確性については、これらの展示は、いずれも十分な研究と検討を経たものであり、担保されている。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数	入館者数			
判定	A	A	S			
備考 特別展図録：2冊、カタログ3冊 講演会：2回、ギャラリートーク3回 年間入場者数：133,312名（目標：55,400名）						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会を年間4回開催し、展示図録等も計画通り以上に刊行することができた。講演会も計画通り2回開催したうえで、ギャラリートークも実施できた。定量的にも、年間入場者数が、目標値を大きく上回っている。このため、総合的評価をAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今次中期計画のいずれの年度も定性的、定量的評価でA以上の評価をあげることができた。特に、年間入場者数は、目標人数を大幅に上回った。

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開（（3））		
【事業概要】 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）に併設された藤原宮跡資料室およびエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 深澤芳樹
【スタッフ】 玉田芳英、次山 淳、降幡順子、石橋茂登、山本 崇、黒坂貴裕、廣瀬 覚、青木 敬、森先一貴、庄田慎矢、番 光、諫早直人、若杉智宏、高橋知奈津、小田裕樹、石田由紀子、木村理恵、高橋 透 [以上、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）]、井上直夫、栗山雅夫、岡田 愛 [以上、企画調整部]			
【主な成果】 常設展示および発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスに発掘調査成果を速やかに公開するための速報展示コーナーを設け、多様な成果を継続的に公開した。あわせて、職員による展示解説、展示のための各種資料制作、パンフレットなどの企画と制作、各地の博物館などへの文化財の貸与をおこなった。			
【年度実績概要】 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。また、申請のあった団体などへは展示説明、藤原宮跡および発掘調査現場の案内などの対応をした。 庁舎エントランスに設けた発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、「甘樫丘東麓遺跡の土器、檜隈寺の土器（第157次・第159次調査）」「大極殿院回廊出土瓦（第160次調査）」「大極殿院南門の土層はぎ取り（第160次調査）」（以上前年度から継続）、「藤原宮朝堂院朝庭（163次）」「甘樫丘東麓遺跡、古宮遺跡（山田道の変遷）（161・152-8次）」「水落遺跡（165次）」「檜隈寺周辺の調査（164次）」の各展示を実施した。 利用者むけ印刷物としてパンフレット『藤原宮跡資料室案内』、リーフレット『特別史跡藤原宮跡』を制作し、あわせてマスコットキャラクターを多用した児童向けワークシートと解説を作成した。 また、各地の博物館などの求めに応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与、保管遺物のレプリカ作成などへの協力をおこなった。		 エントランスの速報展示コーナー	
【実績値】 平成22年度の入室者数は4,815名、開室日242日。 各種団体などへの展示説明11件、他機関への所蔵品貸出16件。 印刷物など3件（印刷物2件①②、その他1件③）。			
【備考】 ①奈良文化財研究所『藤原宮跡資料室案内』2010.11 ②奈良文化財研究所『特別史跡藤原宮跡』2011.3 ③奈良文化財研究所『ワークシート「ぼくの仲間をさがしてください」』2010.9			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6314

自己点検評価調書

研究所 No. 77

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示により公開することで多様な要望にこたえている。 独創性：展示公開のための文化財の保存修復作業、調査機関ならではの豊富な実物展示に独創性がある。 また児童向けにオリジナルのワークシートを作成した。 発展性：速報展示の展示方法と内容に工夫をし、各遺跡の特徴に的を絞った展示を実現している。 継続性：常設展示および速報展示を通年で公開し、内容を適宜変更している。						

2. 定量的評価

観点	入室者数					
判定	A					
備考 年間入室者数 4, 815名（目標 4, 500人）						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	常設展示とともに、エントランスでの速報展示コーナーの内容が一層充実し、調査成果の速報性がより高まった。入室者数も適正であり、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	速報展示なども充実した内容のもとに継続的に実施されており、順調と判断した。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6411

業務実績書

研究所 No. 78

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の運営 ((4))		
【事業概要】 平城宮跡への来訪者に奈良文化財研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】 渡邊淳子 [企画調整部]、永井あつ子、車井俊也 [以上、研究支援推進部]			
【主な成果】 高い知識に基づくガイドを多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。			
【年度実績概要】 この事業は10年を超え総体的に定着してきているが、今年度は特に4月～11月の平城遷都1300年記念事業（平城宮跡会場）期間中には、「平城宮跡探訪ツアー」事業の定点ガイドボランティアとして参加したほか、都城発掘調査部の研修と指導を受けながら、発掘現場解説も行なった。 また、期間終了後は同事業の「ツアーガイド」としてボランティアに参加したメンバー73名を新たに当研究所のボランティアとして受け入れ、平成23年1月～3月に講義・実習・日帰り体験等の研修を行うことにより知識の研さんとガイド技術の熟達を促進し、今後の運営の充実を図った。			
【実績値】 ・平城宮跡解説ボランティア登録数：187名 ・ボランティア解説受講延べ人数：約362,000人 ・ボランティアに対する学習会等 第5期生基礎研修 3日間			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6411

自己点検評価調書

研究所 No. 78

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 適時性：平城遷都 1300 年記念事業期間を含めて、来訪者の需要・必要性に対し公開性もって十分な対応が出来た。 発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、その反響は大きかった。 効率性：解説に係る時間的・人的投資は効率よく出来た。 継続性：とぎれず継続して解説者の配置行うことが出来た。 正確性：研修で得た知識経験を基に正確な情報を伝えることが出来た。						

2. 定量的評価

観点	ボランティア登録者数	解説受講者数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城遷都 1300 年記念事業期間中、約 3 6 0 万人が訪れた平城宮跡において、定点ガイドとして昨年の約 4 倍に上る約 3 6 万人に効率よくガイドを行い、文化財の理解を広めることに大きく貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティアへの更なる研修機会提供、登録ボランティア数の維持、解説受講者数の増加などボランティア運営に対する積極的な支援が順調に実現できたと考える。 今後もこのペースを維持し、奈良文化財研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6412

業務実績書

研究所 No. 79

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	各種ボランティアに対する活動機会・場所の提供、文化財に関する学習会の実施等への支援 ((4))		
【事業概要】 平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、平城宮跡（施設を含む）を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 田中康成
【スタッフ】 永井あつ子、車井俊也〔以上、研究支援推進部〕			
【主な成果】 ボランティア団体への支援は、その育成につながった。			
【年度実績概要】 平成13年11月に設立された「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動機会、活動場所、講師の派遣など積極的な活動支援を行った。 平成22年7月31日には、「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」と共催で、「平城っ子歴史教室特別編」を平城宮跡内に設置された「まほろばステージ」で開催した。			
【実績値】 奈良文化財研究所が支援し、ボランティアが実施した主な事業名称、回数、活動場所、従事ボランティア数、参加者数 平城宮跡歴史文化講座、3回開催、平城宮跡資料館、ボランティア延べ45名、参加者数延べ450名 万葉集勉強会、12回開催、平城宮跡資料館、ボランティア延べ48名、参加者数延べ250名 平城っ子歴史教室、11回開催、平城宮跡資料館、ボランティア延べ61名、参加者数延べ198名、(講師派遣) 拓本づくり教室、6回開催、平城宮跡資料館、ボランティア延べ29名、参加者数延べ152名			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6412

自己点検評価調書

研究所 No. 79

1. 定性的評価

観点	継続性	効率性	発展性			
判定	A	A	A			
備考 継続性：支援し実施された事業は、継続的に連続するものであった。 効率性：奈良文化財研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表が出来た。 発展性：子供達等への将来につながる影響のある体験学習等が実施された。						

2. 定量的評価

観点	支援事業数等					
判定	A					
備考 支援事業（従事ボランティア数、講師派遣、参加者数）は、昨年度実績と同じである。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城っ子歴史教室への講師派遣、平城宮跡内での清掃活動への用具等の提供、平城宮跡歴史文化講座等への活動場所提供の支援を行い、活動の活性化に貢献した。 これらを総合的に判断して、Aと認めたものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティア団体の要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティア育成に寄与したい。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6413

業務実績書

研究所 No.80

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力・支援 ((4))		
【事業概要】 文化庁平城宮跡等管理事務所の運営に対する積極的協力を以下のとおり実施する。 ○施設の公開・利用等に係る連絡調整及び連携協力 ○各種行事、発掘調査等の連絡調整 ○修繕等に係る相談、状況の把握、等			
【担当部課】	研究支援推進部・研究支援課 研究支援推進部・連携推進課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 紅林 孝彰 連携推進課長 田中 康成
【スタッフ】 今西康益、飯田信男、永井あつ子、車井俊也、松本正典 [以上、研究支援推進部]			
【主な成果】 ◇平城宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営及び飛鳥・藤原宮跡の保存活用に対し、積極的な協力を行った。 ◇文化庁宮跡等整備及び公開活用等事業等に対し、積極的な支援協力及び関係機関等との調整を行った。 ◇関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務 平城宮跡、藤原宮跡の維持管理のために、宮跡地内の草刈・植栽業務等を実施した。 ○平城宮跡 [対象面積：915,150 m ²] ○藤原宮跡 [対象面積：257,840 m ²]			
【年度実績概要】 ◇平城宮跡における文化庁平城宮跡等管理事務所の運営及び飛鳥・藤原宮跡の保存活用に対し、積極的な協力を行った。 ○宮跡の公開・活用事業に対する協力・支援、利用申込み等に対する連絡及び申込者との打合せ ○各種行事、発掘調査等に係る連絡調整 ○宮跡内建物、工作物等の維持管理・修繕に当たり、状況の把握、文化庁・業者との連絡調整、現場監理等 ・平城宮跡内東院庭園池循環設備修理及び清掃等維持管理 ・国有地公有化範囲等国有財産の状況確認 ・平城宮跡内グレーチング、外灯等设备、兵部省式部省等遺構表示等工作物の修理及び維持管理 ○住民等からの苦情対応・取次ぎ及び周辺自治会等との協力 ・宮跡内水路、道路等の修理等環境改善及び維持管理等 ・蜂の巣駆除等、日常環境改善維持管理 ・宮跡来訪者・利用者等一般からの申し出（防火、防犯、植生、運営等）対応、文化庁への調整 ・地元自治会との協力対応、文化庁への調整 ○平城宮跡内禁止行為等への対応・異状報告 ・平城宮跡内火災対応及び救急車出動対応 ・禁止行為等看板設置に関する文化庁への協力 ・宮跡毀損事故、事件及び不法投棄等禁止行為への対応及び文化庁への調整 ○平城宮跡安全安心連絡協議会で平城宮跡みまもり隊を企画・構成、パトロールを実施 ○所轄消防署警察署との連絡調整 ・火災、盗難・強盗等事件捜査への協力、連絡調整 ◇文化庁宮跡等整備及び公開活用等事業等に対し、積極的な支援協力及び関係機関等との調整を行った。 ○文化庁事業への支援・協力 ・東院庭園の名勝指定に関する資料提供等支援協力 ・大極殿正殿復原整備、遺構展示館改修、大極殿高御座製作、大極殿・遺構展示館内部展示、大極殿小壁彩色製作の計画・設計・整備等推進への等文化庁事業への支援・協力 ・大極殿小壁彩色制作の実行調整及び現場制作管理 ・高松塚古墳仮整備、山田寺跡復旧整備事業の計画・設計・整備推進等、文化庁事業への支援・協力 ・平城宮跡の国営公園化に関する事業の計画・設計・整備推進等、国土交通省への支援・協力及び文化庁との調整 ・平城遷都 1300 年記念事業実施に関する文化庁との調整 ◇関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務 ○平城藤原宮跡の維持管理のために宮跡地内の草刈植栽業務等及び宮跡地内における不具合対応策提案を実施した。 ・平城宮跡 草刈り等（芝、雑草、草花類） 実施時期：4～11 月、作業回数：1～8 回 植栽等（表示、景観樹木類） 実施時期：12～3 月 作業回数：1～8 回 その他 側溝等工作物清掃維持、害虫駆除 ・藤原宮跡 草刈り等（芝、雑草、草花類） 実施時期：4～11 月 作業回数：1～2 回 植栽等（表示、景観樹木類） 実施時期：12～3 月 作業回数：1 回 その他 耕作物用水路等隣接部清掃維持、側溝等工作物清掃維持、害虫駆除			
【実績値】			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6413

自己点検評価調査

研究所 No.80

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考 適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応 独創性：宮跡内建物、工作物等の維持管理に寄与 発展性：専門知識を生かした協力による人的投資上の効率性 継続性：需要に応じた継続的な連携協力体制						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

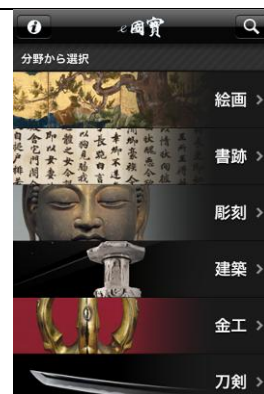
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮跡・藤原宮跡等の公開・活用に必要な準備等に積極的に協力し、また、平城宮跡等において発生する緊急性の高い連絡等に、良く対応している。 さらに、平城宮跡国営公園化や平城遷都1300年祭記念事業の実施に伴う専門的支援を行っており、これら事業の推進に伴う文化庁等からの相談等に良く対応している。 これら実績から、Aとしたものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設の公開・利用等の連絡、各種行事・工事・発掘調査の連絡、修繕相談・状況の把握等、各業務について積極的に協力できた。 特に、事故・事件、火災、修繕相談等は、緊急性の高い場合が多かったが、適時・的確に対応できた。 なお、今後、平城宮跡国営公園化や平城遷都1300年祭記念事業の実施に伴い、平城宮跡等の管理の協力・支援のあり方について検討する。

中項目	6 情報発信機能の強化
-----	-------------

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ①ウェブサイト等による情報の発信								
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	博物館情報課長 高橋裕次					
実績・成果	・情報アーカイブサイトでの調査研究成果の公開を継続した。 ・モバイルサイト開設については処理番号 2131 を参照。 ・国指定文化財の高精細画像および解説文（e 国宝）についてデータ整備を進め、展示室およびインターネットで一般公開した。 ・「e 国宝」を閲覧するための iPhone アプリを開発、公開した。 ・国指定文化財について 3 次元計測に基づく動画を作成し、展示室およびインターネットで公開した。								
補足事項	・ウェブサイト「東京国立博物館情報アーカイブ」を運用し、研究員の調査研究成果の一部と科学研究費による成果データベース（古地図、古写真、博物図譜、古文書）の公開を継続した。 ・デジタル化した画像ファイルとメタデータを効率的に公開・提供するため、画像管理システムをリニューアルした。					 「e 国宝」 iPhone アプリ			
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	ウェブサイトへのアクセス件数	4,971,306 件	1,928,966 件	S		5,504,468	5,211,261	5,687,673	4,971,306
	検索対象画像の拡充	約 246,000 点	—	—		約50,000点	約51,000点	約164,177点	約246,000点
年度実績評価総括	㊟ A B C F （S、Fの理由）インターネットの急速な普及と当館ウェブサイトの充実等により、ここ数年、アクセス件数が目標値を大きく上回り、当館からの情報発信に多大な役割を果たしている。								
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					

【書式A】

施設名

京都国立博物館

処理番号

6612

中項目	6 情報発信機能の強化									
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ①ウェブサイト等による情報の発信									
担当者	担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	総務課長 植田義雄 列品管理室長 若杉準治						
実績・成果	・特別展覧会「長谷川等伯」において、過去1週間の混雑状況を時系列で掲載したウェブページを公開し、パソコン端末や携帯電話で、来館者に過去の混雑状況をお知らせできるよう配慮した。また、当日の混雑状況のQRコードを館内及び当館看板設置場所に掲示し、携帯電話端末用ウェブサイトの利用を促進した。 ・当館ウェブサイト、研究者一覧のウェブページを作成し、研究員の自己紹介、主要業績及び過去3年の執筆物を掲載した。 ・研究紀要「学叢」を創刊号からすべてを当館のウェブサイトに公開した。 ・新刊の博物館ディクショナリーをメールマガジンで配信した。 ・収蔵品の貸与情報を当館のウェブサイトに公開した。トップページに直接のリンク先を設け、閲覧者へのサービスの充実を図った。									
補足事項	・アクセス解析ツールを新規導入し、当館ウェブサイトのユーザーセッション数を把握できるように改善した。これにより、より正確なページアクセス件数を割り出すことができ、どのようなページにアクセス数が多いかを把握できるようになった。 ・来館者のニーズに応じて作成した「東山七条周辺絵図」をウェブサイトで公開した。 ・パソコン向けサイト及び携帯電話端末用サイトにおいて、特別展覧会、各種講座・イベント等のコンテンツを適宜更新し、モバイルユーザーに対して、最新の博物館情報の提供に努めた。また、月1回発行しているメールマガジンについても、同様に最新の博物館情報の提供に努め、特別展覧会の混雑状況や、イベント情報について臨時号の発行も随時行った。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	ウェブサイトへのアクセス件数	805,935 (トップページビュー数) 2,077,562 (ユーザーセッション数)	521,965 —	S —		733,885 —	1,409,634 —	848,486 —	805,935 2,077,562	
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)									
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					

中項目	6 情報発信機能の強化
-----	-------------

事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ①ウェブサイト等による情報の発信																										
担当者	担当部課	学芸部情報サービス室	事業責任者	情報サービス室研究員 野尻 忠																							
実績・成果	・ 展覧会名称の変更にもない、携帯用ウェブサイト内の表記の全面的な改定をおこなった。 ・ PC用ウェブサイト内で公開している写真データベースに、新たに2,303件のデータを追加した。 ・ PC用ウェブサイト上に、研究員の専門分野と研究課題・調査成果を記した一覧を新たに掲載した(5月)。 ・ 季刊誌『奈良国立博物館だより』に、研究員が調査研究成果を紹介する欄を設け、毎号(年4回)、記事を掲載している。 ・ 『鹿園雑集』12号を刊行し、論文1本、資料紹介1本のほか、調査報告・修理報告等を掲載した。 ・ 読売新聞紙上に、研究員による展示文化財の解説記事を連載している(通年、隔週) ・ 名品展の展示替えによって新規に展示される文化財について、その解説文を盛り込んだプレスリリースを作成し、マスメディア向けに発信した(12月)。																										
補足事項	研究者一覧 2019年4月現在 ◆館長 <table><tr><th></th><th>氏名・職名</th><th>自己紹介</th></tr><tr><td></td><td>蓮山 寛一 Yuyama Ken'ichi 館長</td><td>専門は古文書学、日本中世史、日本古文書学会会長。編纂書に『日本の書』第90号『書史の書』(国文学、平成20年)、『文化財と古文書学―藤田鳴鶴―』(勉誠出版、平成21年)。近年は書代、中世を中心に古文書、典籍の刊行や形意等に関する研究をおこなっている。</td></tr></table> ◆学芸部長 <table><tr><th></th><th>氏名・職名</th><th>自己紹介</th></tr><tr><td></td><td>西山 厚 Nishiyama Atsushi 学芸部長</td><td>専門は日本仏教史。鎌倉時代の仏教への関心から始まり、時代と内容の次第に拡大。現在は、仏教を中心に、人物に焦点をあてながら、日本の歴史・思想・文学・美術を総合的に捉え、思い書き、生きた書画で語る活動を行っている。おもな著書に『仏教発見!』(講談社現代新書)、『僧侶の書』(国文学)など。担当した特別展は『鎌倉仏教』(平成5年)、『東大寺文庫の世界』(平成11年)、『女性と仏教』(平成15年)、『東大寺公慶上人』(平成17年)など。</td></tr></table> ◆学芸部研究員(担当分野別・五十音順) <table><tr><th>担当分野</th><th>氏名・職名</th><th>自己紹介</th></tr><tr><td></td><td></td><td>専門は書や江戸絵巻図巻、鎌倉時代書、室町時代書、江戸時代書</td></tr></table> PC用ウェブサイト上の「研究員一覧」 研究員の専門分野と研究課題・調査成果が一目でわかる										氏名・職名	自己紹介		蓮山 寛一 Yuyama Ken'ichi 館長	専門は古文書学、日本中世史、日本古文書学会会長。編纂書に『日本の書』第90号『書史の書』(国文学、平成20年)、『文化財と古文書学―藤田鳴鶴―』(勉誠出版、平成21年)。近年は書代、中世を中心に古文書、典籍の刊行や形意等に関する研究をおこなっている。		氏名・職名	自己紹介		西山 厚 Nishiyama Atsushi 学芸部長	専門は日本仏教史。鎌倉時代の仏教への関心から始まり、時代と内容の次第に拡大。現在は、仏教を中心に、人物に焦点をあてながら、日本の歴史・思想・文学・美術を総合的に捉え、思い書き、生きた書画で語る活動を行っている。おもな著書に『仏教発見!』(講談社現代新書)、『僧侶の書』(国文学)など。担当した特別展は『鎌倉仏教』(平成5年)、『東大寺文庫の世界』(平成11年)、『女性と仏教』(平成15年)、『東大寺公慶上人』(平成17年)など。	担当分野	氏名・職名	自己紹介			専門は書や江戸絵巻図巻、鎌倉時代書、室町時代書、江戸時代書
	氏名・職名	自己紹介																									
	蓮山 寛一 Yuyama Ken'ichi 館長	専門は古文書学、日本中世史、日本古文書学会会長。編纂書に『日本の書』第90号『書史の書』(国文学、平成20年)、『文化財と古文書学―藤田鳴鶴―』(勉誠出版、平成21年)。近年は書代、中世を中心に古文書、典籍の刊行や形意等に関する研究をおこなっている。																									
	氏名・職名	自己紹介																									
	西山 厚 Nishiyama Atsushi 学芸部長	専門は日本仏教史。鎌倉時代の仏教への関心から始まり、時代と内容の次第に拡大。現在は、仏教を中心に、人物に焦点をあてながら、日本の歴史・思想・文学・美術を総合的に捉え、思い書き、生きた書画で語る活動を行っている。おもな著書に『仏教発見!』(講談社現代新書)、『僧侶の書』(国文学)など。担当した特別展は『鎌倉仏教』(平成5年)、『東大寺文庫の世界』(平成11年)、『女性と仏教』(平成15年)、『東大寺公慶上人』(平成17年)など。																									
担当分野	氏名・職名	自己紹介																									
		専門は書や江戸絵巻図巻、鎌倉時代書、室町時代書、江戸時代書																									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22																		
	ウェブサイトアクセス件数	3,121,270件	670,948件	S		1,402,834	1,230,774	2,630,035	3,121,270																		
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)																										
中期計画記載事項	ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。																										
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調																						

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 6614

中項目		6 情報発信機能の強化																	
事業名		(6) 文化財情報・研究成果の公表 ①ウェブサイト等による情報の発信																	
担当者		担当部課		広報課 総務課		事業責任者		広報課長 不動勝義 総務課長 岩崎英明											
実績・成果		①ウェブサイト利用者からの意見に、九博メールで対応 ②特別展ごとに「ぶろぐるぽ」を実施 ③「九州国立博物館メールマガジン」の会員を12月末ウェブサイト等で募集した。 ④「九州国立博物館メールマガジン」創刊号を1月15日に配信し、今後、月2回配信予定。 ⑤混雑した「没後120年 ゴッホ展」において、ウェブサイト・携帯サイト等で混雑状況について情報提供をした。																	
補足事項		②「ぶろぐるぽ」への記事の投稿件数 ・ 特別展『パリに咲いた古伊万里の華』 27件 ・ 特別展『馬 アジアを駆けた二千年』 26件 ・ 特別展『誕生！中国文明』 20件 ・ 特別展『没後120年 ゴッホ展』 36件 ③情報の一方的な提供とならないよう、会員参加型メールマガジンとする予定。また、情報毎にウェブサイトの該当頁にリンクすることで、個別情報の詳細については、ウェブサイトを開覧するため、アクセス数の向上に寄与する。  九州国立博物館メールマガジン																	
定量的評価		項目		実績		目標値		評価		19		20		21		22			
		ウェブサイト アクセス件数		4,708,102件		783,487件		S		経年変化		5,943,616		5,699,860		7,459,518		4,708,102	
年度実績 評価総括		S ㉠ B C F (S、Fの理由)																	
中期計画 記載事項		ウェブサイト等自主媒体の活用及びマスメディアとの連携強化等により、広く国内外に情報を発信する。 ウェブサイトのアクセス件数は年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回ることとする。																	
中期計画に対して順調に成果を上げているか。										順調									

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-1 デジタル化の推進								
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課	事業責任者	博物館情報課長 高橋裕次					
実績・成果	・ 列品管理データベースを更新し、列品情報の公開を行うためのデータ整備を推進した。 ・ 収蔵品等のモノクロ画像のデジタル化を継続した。 ・ 国指定文化財のデジタル撮影を集中的に実施し、既存の画像データについては編集・加工を行なった。また国指定文化財の情報と解説文を整備し、英、仏、中、韓の各国語に翻訳して公開した。 ・ 国指定文化財について 3 次元計測によるデジタル化を実施した。 ・ 法隆寺献納宝物のデジタルアーカイブの提供を継続した。								
補足事項	○収蔵品等の写真の高精細デジタル化 ・ 所蔵品等の 4×5 モノクロフィルムの高精細デジタル化を実施した。 ・ カラーのデジタルデータについては、来館者をはじめとする幅広い利用者の求めに応じて、利用に供した。 ・ マイクロフィルムについては、インターネットを通じた情報提供のためのシステムを導入した。 ・ マイクロフィルムについては昨年度デジタル化が完了したため 0 件となった。カラーおよびモノクロフィルムも完了し、今後は撮影そのものがフィルムからデジタル撮影に移行していく。 ○国指定文化財 8 件について 3 次元計測を実施した。 ○法隆寺献納宝物のデジタル高精細画像等の提供 ・ 事業計画のとおり法隆寺献納宝物デジタルアーカイブの提供を継続した。  3 次元計測データ 《十二神将立像 巳神》								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	デジタルデータ作成件数	8,639 件	73,000 件 (18,829 件)	C		124,996	139,000	775,300	8,639
	うちカラーフィルム	5,136 件	3,000 件	S		3,396	2,583	3,480	5,136
	うちモノクロフィルム	3,503 件	10,000 件	C		0	14,817	23,639	3,503
	うちマイクロフィルム	0 件	60,000 件	F		121,600	121,600	748,181	0
	収蔵品の基本情報のデータ化	13 万字	30 万字	C		30 万	55 万 3 千	123 万	13 万
年度実績 評価総括	S A (B) C F (S、F の理由)								
中期計画 記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すため、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。				順調					



3次元計測データ
《十二神将立像 巳神》

【書式A】

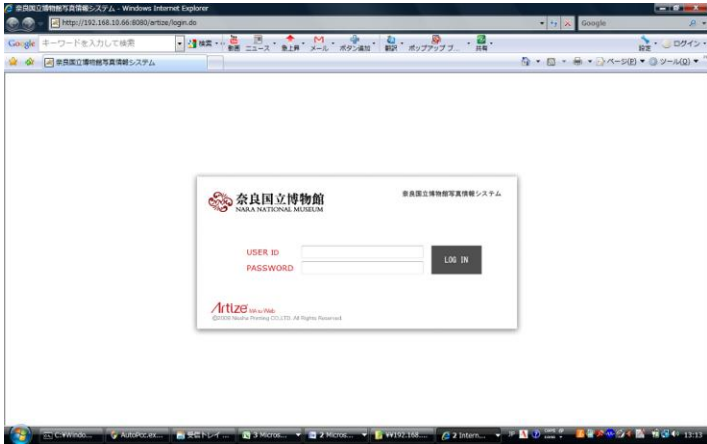
施設名

京都国立博物館

処理番号

6622-1

中項目	6 情報発信機能の強化									
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-1 デジタル化の推進									
担当者	担当部課 総務課			事業責任者		総務課長 植田義雄				
実績・成果	・収蔵品のデジタルデータを作成し文化財情報システム及び公開収蔵品データベースへの登録を随時行い、当館デジタルアーカイブ及び公開情報サービスを行った。 ・重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」で 21 年度より公開されている 6 カ国語（日英韓中仏西）による解説について、内容及び表示方法等について修正を行った。									
補足事項	・マイクロフィルムのデジタル化及び X 線フィルムのデジタル化を併せて行った。  公開収蔵品データベース  重要文化財高精細画像公開システム「KNM GALLERY」									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22	
	デジタルデータ 作成件数	4,594 件	4,359 件	A		8,047	6,478	5,603	4,594	
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)									
中期計画 記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すため、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-1 デジタル化の推進								
担当者	担当部課	学芸部資料室		事業責任者		資料室長 宮崎幹子			
実績・成果	本事業は、仏教美術を中心とする文化財に関わる情報資源の構築を図り、館内における調査研究に活用するとともに、館外研究者ならびに広く一般への公開をおこなうことを目的としており、このことを実施するために必要な情報システムやネットワークシステムの構築等、環境整備もあわせて行った。 データベース： - 調査および写真撮影をおこなった文化財について、情報システムへデータを入力し、5,190件登録・更新した。 - 上記のうち公開準備のできたデータを写真データベースから2,892件公開した。 21年度に正式公開した収蔵品データベースを更に充実させるため、データ整備を継続して行い、文字データ：98件、画像データ：1,273件を更新した。 - デジタル撮影の開始、デジタル画像の運用管理、情報公開を推進する準備作業として、写真情報システムのリニューアルを進めた。 画像データ： - 館蔵品・寄託品・その他の文化財について、カラーポジフィルム4,255枚、X線フィルム56枚をデジタル化した。								
補足事項	・デジタル撮影の実施と、デジタル画像の外部提供を来年度から本格的に推進するにあたり、環境整備、人員確保の面で更なる充実が必要である。  金剛力士立像（東大寺蔵） 〈デジタル撮影〉  写真情報システム								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	登録データ	5,190件	2,000件	S		3,889	6,989	12,339	5,190
	公開データ	2,892件	—	—		2,017	4,019	5,825	2,892
	デジタル化件数	9,501件	8,471件	A		4,584	8,399	102,894	9,501
年度実績 評価総括	S ㊦ B C F (S、Fの理由)								
中期計画 記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く後世に記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等により広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、年間の平均が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 6624-1

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-1 デジタル化の推進								
担当者	担当部課	文化財課			事業責任者	資料管理室長 小林 公治			
実績・成果	①昨年度に引き続き、当館で収蔵している国指定文化財のうち 19 件の収蔵品のデジタル画像公開プログラムの制作を行った。これにより館内設置のパソコンおよびインターネットを通じた情報提供が可能となった。 ②独立行政法人国立文化財機構で制作、管理公開しているインターネット情報公開プログラム e 国宝に当館が収蔵する国指定文化財の解説およびデジタル高精細画像を提供し、公開した。 ③収蔵品写真のデジタル化を行った。(1,391 件) ④当館所蔵の指定文化財のうち、国宝栄花物語についてその一部をカラーボジ撮影し、デジタル画像化を行っている。								
補足事項	①当館収蔵の国指定文化財情報のデジタル公開については、文化財解説および高精細画像に加え、当館が独自で所有する理化学機器（CT スキャニング、3D 画像）による分析成果の情報提供や、高精細動画・イラストを活用した情報公開も行い、e 国宝との差別化を図っている。 ②e 国宝については、すでにインターネット公開が行われている。 ③本年度は、民族資料や教育参考資料のデジタル画像撮影が一段落したためデジタル化件数は大幅に減っているが、ボジ撮影フィルムのスキャニング件数は例年と同程度数となる見込みである。 ④国宝栄花物語は、全 17 帖のうちの 2 帖の撮影を行い、残る 15 帖分の撮影についても今後検討する。								
									
栄花物語第 2 帖									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年 変化	19	20	21	22
	デジタルデータ 作成件数	1,391 件	1,900 件	B		3,295	3,963	3,574	1,391
年度実績 評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)								
中期計画 記載事項	収蔵品等の文化財その他関連する資料の情報について、永く記録を残すために、デジタル化を推進し、文化財情報システム等を活用してより広く積極的に公開する。また、収蔵品等に関するデジタル化件数は、当該期間の平均数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るようにする。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				



栄花物語第2帖

中項目	6 情報発信機能の強化									
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実									
担当者	担当部課	学芸企画部博物館情報課			事業責任者	博物館情報課長 高橋裕次				
実績・成果	- 資料館における美術史等の情報・資料の公開のため、図書資料等のデータ整備を推進した。 データ整備件数：新規図書 7,345 冊、逐次刊行物 4,684 冊、遡及入力 7,836 冊 - 資料館において資料の閲覧、複写およびレファレンスサービスを継続して実施した。 - 法隆寺宝物館において、観覧者向け図書コーナーサービスを継続した。 - 調査・研究・教育などに有益な情報及び関係資料を収集した。 収集件数：購入図書 514 冊、寄贈・交換図書 6,831 冊、館蔵品等の写真資料 5,577 枚 - 閲覧室開架書架の増設（22 年 4 月）および埋蔵文化財報告書等の移動（23 年 3 月）を行った。 またそれに伴い所在データを更新し、館内配置図を作成した。 - 有料ゾーンからの資料館入退館経路の検討を行った。 - 震災の影響として直接の被害はなかったが、安全確認と社会的諸事情に鑑み、23 年 3 月 14 日～31 日まで臨時休館した。23 年 4 月末まで休館の予定である。									
補足事項	〈収集〉 - 東京国立博物館の収蔵品に関連する分野を中心に、博物館の調査研究、展示、教育普及、保存修復等の業務に必要な資料および一般利用者の利用に供するための資料を収集した。新規購入図書については購入希望図書を元に候補リストを作成し、合同会議で了承を得て購入している。 - 国指定文化財のデジタル撮影を集中的に実施し、約 5,500 カットの画像を作成した。 〈データ整備〉 - 新規受入図書とは別に、遡及入力を行い、漢籍（線装本）2,634 冊、洋貴重書 973 冊、複製本 219 冊、個人文庫 2,412 冊など、計 7,836 冊の既存図書のデータを作成した。 - 東京国立博物館開催の展覧会の出品作品のデータベース化をすすめ、データの蓄積に努めた。 - 雑誌等の製本 422 冊を実施した。 〈公開〉 - 国立情報学研究所の目録所在情報サービス (NACSIS-CAT) および美術館図書室横断検索に継続して参加し当館蔵書への検索サービスの向上に努めた。 - 東京国立博物館刊行図書・等の目次・論文データの入力を継続して行った。 （OPAC 公開数：図書約 18 万冊、雑誌約 6 千タイトル、目次・論文データ約 6 千件） - 図書資料の展示コーナーおよび新着書架において、所蔵資料の紹介（年 6 回）、月毎の新着資料の展示、展覧会関連図書の展示を行った。 - 新着図書の案内等のライブラリーニュースを随時発信した。									
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22	
	収蔵品等の写真撮影・関連データ整備	11,114 件	—	—		3,642	4,721	16,567	11,114	
	うちフィルム撮影	5,577 件	3,000 件	S		3,642	4,703	4,177	5,577	
	うちデジタル撮影	5,537 件	—	—		0	18	12,390	5,537	
	新規図書整理	7,345 件	—	—		4,013	7,781	3,411	7,345	
	遡及図書整理	7,836 件	—	—		4,574	5,709	11,105	7,836	
	年度実績評価総括	S (A) B C F (S、F の理由)								
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。									
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調					



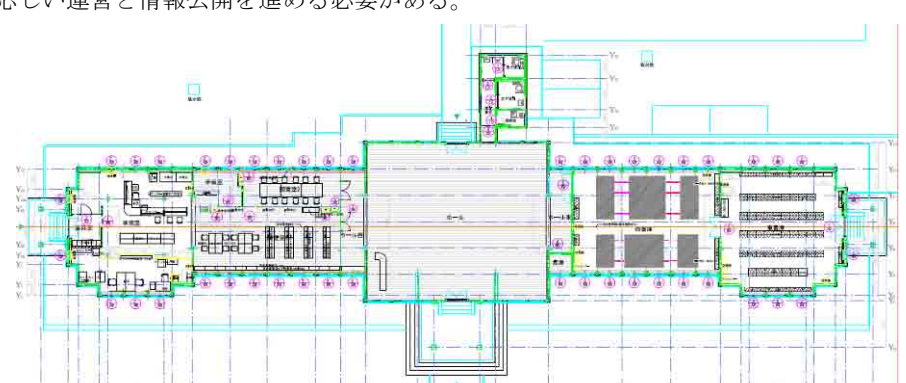
「資料館所蔵資料紹介コーナー」

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 6622-2

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実								
担当者	担当部課	学芸部			事業責任者	列品管理室長 若杉準治			
実績・成果	- 平成21年度に構築した蔵書検索システムの不具合を訂正しながら整備を進めた。 - 平成21年度に構築した文化財情報システム（所蔵作品検索システムと学芸業務支援システムを兼ね備えたシステム）の不具合を訂正しながら整備を進めた。 - 収蔵品、展覧会出品作品等の撮影写真、及び社寺調査等での撮影写真並びに関連データを整備した。 - 写真は漸次写真画像管理システムに登録し、各種データベースへの二次提供を行った。 登録件数 3,379件 - 特別観覧件数 972件								
補足事項	- 蔵書検索システムと文化財情報システムの整備については、情報システム検討委員会で常に問題点を共有しながら行った。 - 平常展示館建て替え工事中のため、収蔵庫と写場が離れており、展示室が開館している時間帯は作品の移動ができないため、撮影日程の調整に苦慮した。 - 今年度は、特別展関係の撮影が例年より少なかったことで、原板登録枚数が減少した。 『長谷川等伯』 前年度に先行調査撮影した 『上田秋成』 既撮作品が多かった 『高僧と袈裟』 大型作品のため、数年度にわたって旧写場にて先行撮影した 『筆墨精神』 館蔵品が多く既撮作品が多かった - デジタル画像の提供は、別途「@KYOTOMUSE Digital Archives」(artize.net) を介し継続的に行っている。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	収蔵品・出品作品等の写真撮影及び関連データの整備	3,379件	約5,000件	C		4,256	6,478	3,753	3,379
年度実績評価総括	S A B (C) F (S、Fの理由)								
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。					順調				

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-2 情報・資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実								
担当者	担当部課	学芸部	事業責任者	資料室長 宮崎幹子					
実績・成果	本事業は、博物館の根幹である展示・研究活動を支援すべく、関連する図書・雑誌等の資料を収集・整理し、学芸部の情報資料として活用するものである。また一般利用者に対しても当該資料を当館仏教美術資料研究センターにおいて公開し、サービスをおこなう（今年度は耐震補強工事により休館中で、来年度7月再開を目指し準備している）。 ・昨年度に引き続き、旧地下通路に新たに確保した収蔵スペースに全資料を移動して、館内利用を継続している。現在会議室の一角を仮事務室として受入・登録作業をおこない、年度末の工事完了後の引越にむけて整理作業に人員と時間を要しているため、現在までの新規受入は、図書 777 冊、展覧会カタログ 40 冊に留まっている。 ・今年度より、デジタル撮影を開始し、特別展『大遣唐使展』および『至宝の仏像』の開催に合わせ大量のデジタル撮影をおこなった。デジタル撮影：5,663 カット。 ・昨年度に導入した図書情報システムによる受入・登録作業を継続しておこない、業務の効率化とサービスの向上を図っている。新システムへの移行作業は順調に進み、既に通常業務に活用しているが、来年度のセンター再開にあわせ、目録情報のインターネット公開を目指しており、館内での成果が外部への情報公開に効果的に反映されるよう、更なる情報整備に努めている。 ・同センターの保有する資料の総数は図書約 67,000 冊、展覧会カタログ約 10,000 冊、雑誌約 3,000 タイトルとなっている。今年度は昨年度に引き続き、特別展『大遣唐使展』の開催に関連して、中国仏教関係・対外交流関係の資料を重点的に収集し、不足していた領域の資料の充実を推進させることができた点も特筆される。 ・センターの耐震補強工事を機会に、書庫および閲覧室のレイアウトの全面的なリニューアルをおこなった。年度内に新規に集密書架、固定書架を導入する計画である。これにより、情報資料の利用環境を更に充実させることが叶い、センター再開時に向けて更なるサービスの拡充を進める予定である。								
補足事項	従前より仏教美術に関する資料の充実化をはかっているが、関連研究分野の拡張化や学際化が近年著しく、新たな分野の資料の強化・整備がさらに必要である。今後とも、仏教美術関係の資料収集はもとより、多様な資料の蓄積をはかると共に、効率のよい資料整理・公開の方法について検討し、仏教美術の研究拠点に相応しい運営と情報公開を進める必要がある。  仏教美術資料研究センターの新レイアウト								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	図書	1,271 件	—	—		2,280	1,520	1,129	1,271
	展覧会カタログ	183 件	—	—		532	489	248	183
	収蔵品・出品作品等の写真撮影・関連データの整備	11,684 件	—	—		3,240	6,457	5,818	11,684
	うちフィルム撮影	1,725 件	3,000	C		3,240	6,457	5,818	1,725
	うちデジタル撮影	9,959 件	—	—		—	—	—	9,959
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)								
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能を充実させる。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調						

【書式A】

施設名

九州国立博物館

処理番号

6624-2

中項目	6 情報発信機能の強化								
事業名	(6) 文化財情報・研究成果の公表 ②-2 情報、資料の収集・蓄積、レファレンス機能の充実								
担当者	担当部課	文化財課 交流課	事業責任者	資料管理室長 小林公治 主任研究員 池内一誠					
実績・成果	①収蔵品・出品作品等のポジ写真撮影および関連データを整備した。(2,784件) ②海外調査で撮影した写真やビデオ、また収集した体験用資料を展示や教育普及活動で活用するための整備を行った。 ③対馬宗家文書データベースの効率的な運用を検討し、実施した。 ④博物館資料(収蔵品、図書、写真など)データベースにおける業務の効率化に向けて、現行業務システムを全面的に見直し、より充実した第2次業務システム構築を行った。								
補足事項	①収蔵品・出品作品などについてフィルム撮影のほか、撮影データの収集に努め、画像データベースの充実を図った。 ②情報、資料の収集による展示や教育普及活動 ・特別展や館内イベントの開催等にあわせ、体験型展示室「あじっば」で使用するハンズオン資料の収集を継続して行った。モンゴル関係資料171件、ウズベキスタン関係資料136件、インドネシア関係資料7件、日本関係資料28件(四季の風俗関係28件)、タイ関係資料20件、合計362件のハンズオン資料を収集し、随時展示に活用している。 ・体験用資料収集にあわせて、現地において「あじっば」資料についての情報を収集し、展示に反映させた。体験資料収集先のモンゴル・ウズベキスタンにおいて、現地の遊牧民・民族楽器演奏家・工房職人等から各資料の制作方法・使用方法等について直接聞き取りを行ったほか、作業工程を映像および静止画像に収めることができた。また、タイ国政府観光庁、福岡・ウズベキスタン友好協会からも生活文化や資料についての情報を得ることができた。現地で撮影した静止画像の一部は立体写真に加工して既に「あじっば」で紹介しており、映像や音声についても今後「あじっば」で紹介できるよう加工する予定である。 ④博物館資料(収蔵品、図書、写真など)の横断的データベース ・旧業務システムの問題点改良や対応していない機能への拡充などを目的として、来年度に新規業務システムの構築と運用開始を予定している。またこれと同時に、購入・寄贈・寄託品や借用などによる収蔵品の異動データや図書データは随時入力して、システム移行に伴う欠落や不便が生じないように対応した。 ・現状システムの館内閲覧提供に加え、来年度計画している新規業務システムの構築・運用に向けた暫定システムの設計整備運用を行った。								
定量的評価	項目	実績	目標値	評価	経年変化	19	20	21	22
	収蔵品・出品作品等の写真撮影および関連データ整備件数	2,784件	600件	S		12,556	6,633	4,686	2,784
	うちフィルム撮影	1,357件	—	—					1,357
	うちデジタル撮影	36件	—	—					36
	うちデジタルデータ作成件数	1,391件	—	—					1,391
	ハンズオン資料	362件	—	—			136	161	362
年度実績評価総括	S (A) B C F (S、Fの理由)								
中期計画記載事項	美術史・考古学・博物館学その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の博物館等に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図ると共に、レファレンス機能を充実させる。								
中期計画に対して順調に成果を上げているか。			順調						



収蔵品写真撮影風景



「あじっば」モンゴル屋台